

都市計画街路

七美・太閤山・高岡線内遺跡群

発掘調査概要(3)

南太閤山I遺跡



1985年3月

富山県教育委員会

都市計画街路

七美・太閤山・高岡線内遺跡群

発掘調査概要(3)

南太閤山Ⅰ遺跡

1985年3月

富山県教育委員会

序

本県のほぼ中央に位置する小杉町南部の射水丘陵は、県下でも埋蔵文化財が最も集中する地域として知られております。

富山県教育委員会では、各種の開発事業に先だって、近年、これらの埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。本書に収録した南太閤山Ⅰ遺跡もそのひとつです。

その結果、これまで推測の域を出ることのなかった祖先の歩みが遺跡を通して具体的に明らかになりつつあります。とりわけ、この南太閤山Ⅰ遺跡では、北陸地方では初めて人面墨書き土器が出土し、この地で行われた古代祭祀の一端を物語る貴重な資料として、すでに斯界の注目を浴びております。

こうした調査の成果をまとめた本書が、今後の文化財保護と古代史研究の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施に当たり、ご協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

富山県教育委員会

教育長 國 香 正 道

例　　言

1. 本書は、都市計画街路七美・太閤山・高岡線建設に伴う南太閤山Ⅰ遺跡A地区の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、富山县土木部（都市計画課）の依頼を受けて、富山县教育委員会（富山县埋蔵文化財センター）が実施した。
3. 調査は、富山县埋蔵文化センター主任岸本雅敏・文化財保護主事 関 清・同山本正敏が担当した。
4. 調査事務局は富山县埋蔵文化財センターに置き、主任出村昭夫・文化財保護主事池野正男・酒井重洋が担当し、所長前田英雄が総括した。
5. 出土遺物の観察と評価にあたって、木製品については国学院大学教授乙益重隆氏、人面墨書き土器については奈良大学教授水野正好氏、国立歴史民俗博物館教授吉岡康暢氏から有益な教示をえた。記して感謝の意を表します。
6. 出土種子の同定については、富山大学教養部の吉井亮一氏の協力を得、吉井氏にはその同定結果の報文をいただき本書に収録した。記して感謝の意を表します。
また、花粉分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依託した。同社研究員橋本真紀夫氏には、その結果報告をまとめていただき本書に収録した。
7. 遺物写真の番号は、実測図の番号に対応する。
8. 本書の図版・執筆は、岸本雅敏・関 清・山本正敏が担当し、その執筆分担は各文末に記した。

目 次

I 序 章	1
1 遺跡の位置と環境	1
2 遺跡の立地と層位	2
(1) 立 地	2
(2) 層位と遺物の出土状況	2
3 調査の経緯	3
(1) 調査の契機と既往の調査	3
(2) 調査の方法と経過	5
II 遺 構	6
1 川 跡	6
2 橋状遺構・杭列	9
III 遺 物	11
1 繩文時代	11
2 古墳時代	13
3 奈良時代	20
4 平安時代	33
5 その他の遺物	35
IV まとめ	36
1 川跡の形成と埋没	36
2 木製祭祀具について	37
3 人面墨書き土器について	39
付載 1 富山県南太閤山I遺跡の花粉分析	42
2 富山県南太閤山I遺跡出土の種実遺体	47
参考・引用文献	41

挿 図 目 次

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 | 第14図 上器実測図 |
| 第2図 SD01断面図 | 第15図 土器実測図 |
| 第3図 調査区と区割図 | 第16図 土器実測図 |
| 第4図 遺構全体図 | 第17図 土器・土製品実測図 |
| 第5図 横状遺構・杭列実測図 | 第18図 人面墨書き土器実測図 |
| 第6図 石器実測図 | 第19図 木製品実測図 |
| 第7図 土器拓影・実測図 | 第20図 木製品実測図 |
| 第8図 土器実測図 | 第21図 木製品実測図 |
| 第9図 土器実測図 | 第22図 木製品実測図 |
| 第10図 土器実測図 | 第23図 木製品実測図 |
| 第11図 土器実測図 | 第24図 土器実測図 |
| 第12図 土器実測図 | 第25図 土器拓影・実測図 |
| 第13図 玉類・有孔円板実測図 | 第26図 人面墨書き土器と土師器甕 |

図 版 目 次

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 図版1 遺跡全影 | 図版11 占墳時代の遺物 |
| 図版2 土層セクションと遺物出土状況 | 図版12 奈良時代の遺物 |
| 図版3 横状遺構 | 図版13 奈良時代の遺物 |
| 図版4 SD04遺物出土状況 | 図版14 奈良時代の遺物 |
| 図版5 SD04遺物出土状況 | 図版15 奈良時代の遺物 |
| 図版6 繩文時代の遺物 | 図版16 平安時代その他の遺物 |
| 図版7 古墳時代の遺物 | 図版17 木製品 |
| 図版8 古墳時代の遺物 | 図版18 木製品 |
| 図版9 古墳時代の遺物 | 図版19 木製品 |
| 図版10 古墳時代の遺物 | |

表 目 次

表1 年度別調査一覧

表2 木製品内訳

I 序 章

1 遺跡の位置と環境

富山県は三方を山で囲まれ、一方は日本海となる。南東に連なる北アルプスの山々は、陰阻で天然の屏風にもたえられている。したがって県東部の地勢は、急峻な斜面から一気に日本海へ下る様相を呈している。これに対し県西部は、なだらかな山が多く、ゆるやかに傾斜し、広大な平野部を作る。この平野部につき出すように低い丘陵が北へ延びる。これが射水丘陵・真羽丘陵と呼ばれるもので、古くから県を二分し、文化のあり方にも微妙に関与しているものである。南太閤山Ⅰ遺跡はこの射水丘陵が平野部と接するところに立地している。行政区名では射水郡小杉町南太閤山1丁目及び下条字筱山となる。射水丘陵を形成する地層等については、「小杉町史」前編に詳しく述べ、丘陵上部は第四系洪積層の日宮瓦層と太閤山火碎質層から形成されるという〔木倉編1958〕。日宮瓦層の粘土は、良質で現在でも小杉焼や瓦の原料として利用されている。また、当地域は最近まで山林原野となっており、古代手工業生産に必要な燃料・水・粘土等の供給態勢を備えていたと言える。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 1.南太閤山Ⅰ遺跡、2.南太閤山Ⅱ遺跡、3.変電所西古墳、4.五歩一古墳群、5.上野遺跡、6.圓山遺跡、7.中山南遺跡、8.上野赤坂A遺跡、9.東山Ⅱ遺跡、10.石太郎C遺跡。

当地域では、旧石器時代から現代に至るまで連続と人間の営みを見ることがある。とりわけ、須恵器生産遺跡や鉄生産遺跡が多いのは、恵まれた自然環境が一つの要因であったと言うことができる。周辺の遺跡を概観すると、弥生時代から古墳時代の集落として知られる上野遺跡・中山南遺跡があり、この時期の墓群として、圓山遺跡や五歩一古墳群などがある。また、南太閤山Ⅰ遺跡の北側に位置する変電所西古墳は、最近になって前方後方墳の可能性が指摘されており、本県における古墳発生の手がかりを得るための重要な地域と言える。丘陵のやや奥に入った所では、奈良時代から平安時代にわたる製鉄遺跡が多く、上野赤坂A遺跡や石太郎C遺跡では製鉄炉が発見され、古代の製鉄遺跡の研究に好資料を提供している。なお、隣接する南太閤山Ⅱ遺跡も製鉄遺跡である。

射水丘陵の中央部を流れる下条川左岸には、小杉流通業務団地（以下流団と呼ぶ）造成に伴い、数多くの須恵器窯や古墳などが発見、調査されている。とりわけ流団No.21遺跡では、7世紀代の瓦陶兼業窯が発見され、瓦の供給先も究明されたことから、斯界の注目を浴びている。この流団内でも製鉄遺跡が発見されているが、右岸の太閤山地域と比べてその規模と時代などに若干の違いが見られる。また、墳墓についても弥生時代に満るものは流団内では発見されておらず、射水丘陵を二分する下条川が古代文化のあり方に微妙に関与したと考えられる。 (問 清)

2 遺跡の立地と層位

(1) 立 地

南太閤山Ⅰ遺跡は北陸自動車道小杉インターチェンジの北方約500m、下条川右岸の丘陵上から西側の谷平野中に立地する。丘陵の頂部（B地区）では、昭和58年度の調査で弥生時代終末期の方形周溝墓群が検出されている。

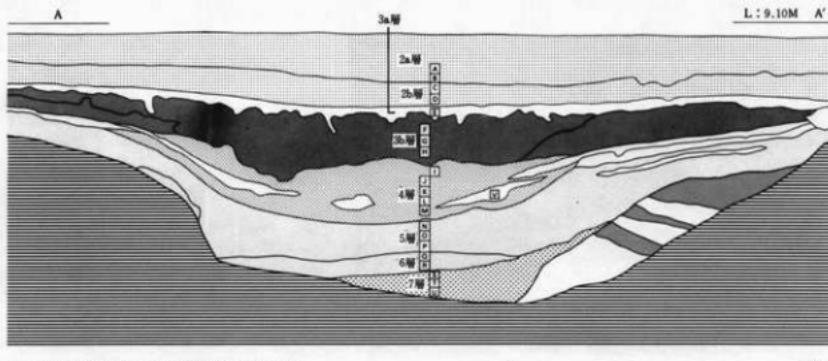
今回調査の対象としたA地区は、丘陵の西側裾から上野集落の一部を含む水田地帯に立地する（第2図）。調査区東端の山裾では標高約10m、他方、140mへだてた西端では標高約9mで、西方に向かってゆるやかに傾斜している。

狭隘な谷平野の中ほどを北流する下条川までの距離はわずか200m足らずである。

(2) 層位と遺物の出土状況

耕作土（1層）の直下によくしまった淡黄色のシルト質土層がみられ、これが造構（川跡）形成面つまり「地山」となっている。地点によっては、1層と地山との間に開田に伴う二次堆積土がみられる。

調査区の西端に近いX1・2 Y8区の堆積から川跡SD01の基本層序を示す以下のとおりである（第2図）。



註：2a層の上に厚さ約30cmの水田耕作土「1層」の堆積あり

第2図 SD01断面図 (1/50)

2層：微粒の砂質土（シルト質）。色調の違いから淡黄灰色の上層（2a層）と淡黄褐色の下層（2b層）に細分できる。2b層の下面近くから主として奈良時代の土師器・須恵器が出土し、さらに古墳時代中期の土師器、後期の土師器・須恵器も含まれる。

3層：粘質土。上面は暗灰褐色で上層の2b層との漸移層として区分しうる（3a層）。古墳時代中期の土師器、古墳時代後期・奈良時代の遺物包含層。

下層（3b層）は暗茶褐色の有機質土で、葉・種子・茎・根などの植物遺体を多く含む。3b層の上面には、第4図に示したとおり自然木がほぼ同一面に密集して堆積していた。3b層の上半部は須恵器を伴わない古墳時代中期の土師器包含層である。

4層：暗褐色砂質粘性土。微粒の砂と粘土が細かな互層をなし、断面では縞状となる。⑤など部分的に植物遺体を多量に含む間層がレンズ状に入る。水性堆積層。無遺物層。

5層：暗褐色の微粒砂混じり粘質土。3層に近い。3層に比べて微粒の砂が多く明るい。無遺物層。

6層：暗茶灰褐色の微粒砂混じり粘質土。砂の薄い堆積がレンズ状に入る。水性堆積層。無遺物層。

7層：茶灰色の砂質粘性土。黄灰色の微粒砂がレンズ状に入る。最下層では砂利層となり、細かな木片と植物遺体を含む。4層と基本的に同質で、水性の堆積であることを示す。最下層の砂利層つまり川底から縄文時代前期・後晩期の土器、弥生時代終末期の土器片が少量出土した。

なお、川跡形成面の「地山」の堆積状況について簡単にふれておく。X3Y13区に南北のトレーナーを設け、標高8.8mの川跡形成面から約3m掘り下げた最下層（標高5.7m）で縄文時代前期の良好な遺物包含層を確認した。この包含層から上面までは水性の自然堆積層で、遺物を含まない。その間の堆積土は大きく9層にわかれれる。1層は黄灰色のよくしまったシルト。2層は黄灰色の微粒砂層で縞状に堆積する。3層は植物遺体を含む砂混じり粘質土。4～7層は植物遺体を多く含む茶褐色ないし黒褐色の粘性泥質土。8～9層は有機質を含む粘土層。

（岸本雅敏）

3 調査の経緯

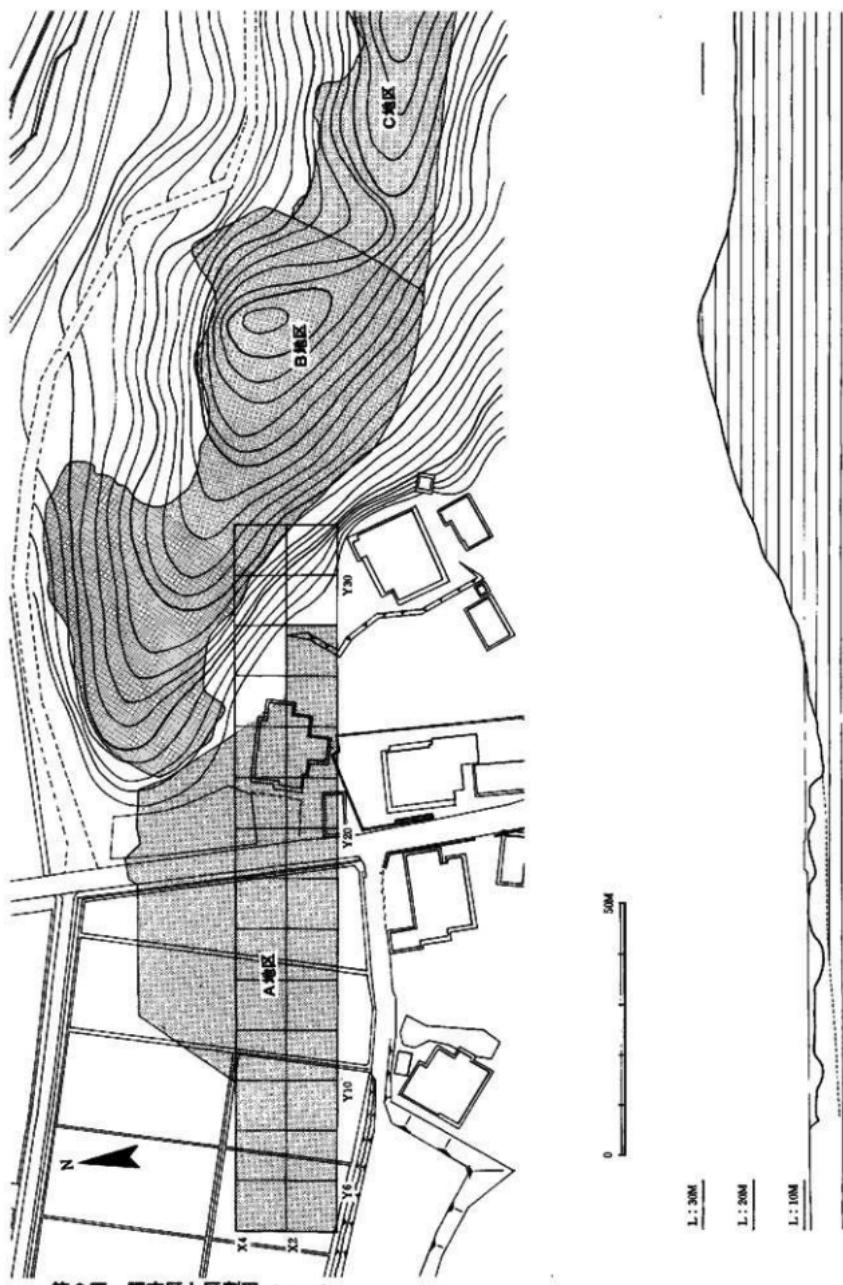
（1）調査の契機と既往の調査

富山県は昭和48年に富山新港臨海工業団地の分譲、太閤山住宅団地の造成及び小杉流団の建設計画の進展に伴う交通量の増加に対処する目的で、新湊市七美から小杉町太閤山を経て高岡市西広上を結ぶ都市計画街路七美・太閤山・高岡線の建設を決定した。

昭和51年12月、富山県教育委員会（以下県教委と呼ぶ）は、工事が具体化した大門町西広上から小杉町黒河にいたる約8kmの区間について、土木部の依頼により分布調査を実施した。その結果、道路建設計画地内に18か所の新たな遺跡を発見し、從来から知られていた大門町布目沢遺跡を加えて19遺跡の存在が明らかになった。

この結果にもとづき、県土木部・県教委そして大門・小杉の両町教育委員会の四者が協議を重ねた結果、大門町に係る7遺跡のうち5遺跡を大門町教育委員会が発掘調査を実施することとし、昭和55年に生源寺遺跡、56年には小泉遺跡が同町により記録保存調査された。また、流団内に所在する4遺跡については、県教委が流団造成工事に伴うものとして、記録保存調査を実施した。

都市計画街路七美・太閤山・高岡線に係る事業として調査の対象となったのは10遺跡で、昭和54年から59年まで6次にわたる記録保存調査を実施した。これらの概要是表1に示したとおりであるが、南太閤山Ⅰ遺跡は昭和58年の慶県百周年事業に関連し、片側車線の供用開始の方針が打ち出されたため、遺跡をA・B・Cの三地区に分割して調査を実施した。また、南太閤山Ⅱ遺跡では、奈良時代と平安時代の製鉄遺構が検出され、県土木部の協力を得て、工区内に現状保存されることになった。



第3図 調査区と区割図 (1/1000)

(2) 調査の方法と経過

南太閤山Ⅰ遺跡は、丘陵部に立地する弥生後期の墓群と西側に広がる古代河道からなる。前述のように昭和58年が滋賀県百年にあたり、その行事の一つである新紀博覧会が当該道路の東方、約1kmに位置する県民公園太閤山ランドで実施されることになり、58年の片側車線供用開始の方針が強く打ち出された。このため調査は、第3図に示すようにA・B・Cの三地区に分割して実施することになった。今回の調査は、A地区の南側部分にある。

調査は昭和57年度に実施した北側部分との関連に重点をおき、区割も57年度のそれにならった。区割りは5mグリッドを基本とし、土層観察用ベルトを10m間隔に残し、東西のそれは、調査区全体を貫くものとなった。

発掘は宅地造成や町道建設時の客土を重機で除去し、西側から順を追って東側へと実施した。調査開始日はおだやかな日和の5月7日であった。20~30cmの旧表土を取り除き、5月下旬にはY10区までの表土排土を完了し、大溝のプランを確認するに至った。大溝には自然木が累々と堆積し、多量の木製品の出土が予想された。自然木の取り上げは、土器と同様に固化し、洗浄の後、サンプルの木片を採取した。また、この頃に、子持勾玉や有孔円盤などの古墳時代祭祀遺物が発見され、周を置かずして、斎事なども発見された。下層に掘り進むにつれ、土器も矛盾なく古くなり、層位関係も概ね確認できた。花粉分析のための土壤サンプル採取を行なったのもこの時期である。大溝はその覆土の観察により、川跡と認められた。

さらに西側に発掘が進んだ7月10日、SD03から人面墨書き土器が出土した。その翌日には、さらにもう一点の人面土器を検出した。人面墨書き土器の出土は、北陸地方では初例となった。7月中旬にはSD04の振り下げを行ない、多量の木製品を検出した。木製品は、盤・橋・刀形木製品・建築部材など多種多様であり、伴出した土器から、古墳時代後期と奈良時代後半に属すると考えられる。SD04は、その覆土の状況から河跡湖や沼沢地と考えられ、これら木製品の多くは、自然木などの状況から推して、洪水などによりSD04に押し流され、堆積したものと考えられる。

橋状造構はこのSD04の南端で検出した。最初はしがらみの木列と考えていたが、自然木を取り除いた段階で橋状の造構と判断した。

8月下旬には、調査区東端すなわち丘陵の裾部に達し、ここで平安時代の細い溝SD05を検出した。以後、造構の固化、写真撮影を実施し、当初目的とした、川路の調査をひとまず完了した。

当遺跡は川路や沼沢地であり、いわゆる自然現象が大きく作用した地区と考えられた。したがって最後に、これらの形成過程を知る目的で、数か所に深いトレーンチを設けた。その結果、SD01の底面よりさらに2m下に良好な繩文時代前期の包含層を確認した。現地表面からの深さは5mに達する。この遺物包含層の取り扱いについては、現在も協議中である。全ての調査を完了したのは9月6日であった。

(問 消)

年度	遺跡名	種類	時代	発見された遺構	備考
54	高 山 遺 跡	集落・製炭	先土器・繩文・奈良・平安	炭焼窯2・溝2・穴10	
55	東 山 I 遺 跡	製 鐵	奈 良?	製鐵炉1・穴1	
56	表 野 遺 跡	集落・製炭	先土器・古墳・奈良	住居跡2・炭焼窯2・溝1・穴7	
	南太閤山Ⅱ遺跡A地区	製 灰	繩文・奈良	炭焼窯2・穴4	
	東 山 II 遺 跡	製 灰	繩文・奈良	炭焼窯2	
57	南太閤山Ⅰ遺跡A・B地区	集落・墓跡	繩文・弥生・古墳・奈良・平安	方形周溝墓4・土塙墓5・住居跡1他	
	南太閤山Ⅱ遺跡B地区	製鉄・製炭	繩文・古墳・奈良・平安	製鐵炉2・炭焼窯1・穴5	現状保存
58	南太閤山Ⅰ遺跡C地区	集落・墓跡	繩文・弥生・古墳・奈良・平安	方形台状(周溝)墓4・住居跡2他	
	南太閤山Ⅱ遺跡C地区	集落・製炭	繩文・奈良	住居跡1・炭焼窯1・穴3	
59	南太閤山Ⅰ遺跡A地区	川 路	繩文・弥生・古墳・奈良・平安	川跡・橋状造構	

表1 年度別調査一覧

II 遺構

1 川跡 (第4図)

時代幅をもつ川跡と溝を検出した。流路の重複する箇所も一部みられるが、以下、SD01～SD05とする。

(1) SD01

調査区の西端近くをU字形に蛇行する旧河道である。調査区北端のX 4 Y 12・13区から南西にのび、X 1・2 Y 9区で蛇行して北西のX 4 Y 6区に至る。川幅は約7m、深さは約2mある。川跡内での土層の堆積状況については前章の「層位」の項で述べたとおりである。川底のレベルが西に向かってしだいに低くなっていることから、水流の方向は南西→北西と考えられる。そして、上流つまりX 4 Y 12・13区の北側は、昭和57年度調査で検出された旧河道につながる。

なお、このSD01と重複してX 3 Y 12区からX 1 Y 9区にかけてSD02が切っている。

(2) SD02

SD01と重複してX 3 Y 12区からX 1 Y 9区へ南西方向にのびる溝である。古墳時代後期と奈良時代の土器を含む。SD01内の東寄りを流れ、東側の肩はSD01のそれと重複する。X 2 Y 11・12区で東西の土層断面をみると、SD01の3b層をえぐるように上層に形成されている。川幅は約6m、深さ約80cmである。第2図に示したSD01の3a層はこの流路に該当すると考えられる。水流の方向は、SD01と同様、南西にのびたのちX 1 Y 8・9区で蛇行してさらに北西に至る。X 3・4 Y 5区の平坦地で検出された砂混じりの奈良時代土器包含層は、SD01と並行して北西にのびており、その流路の一部とみることができる。なお、X 1 Y 9区にみられる幅約60cmの細い溝(第4図)はSD02の川底の一部である。

(3) SD03

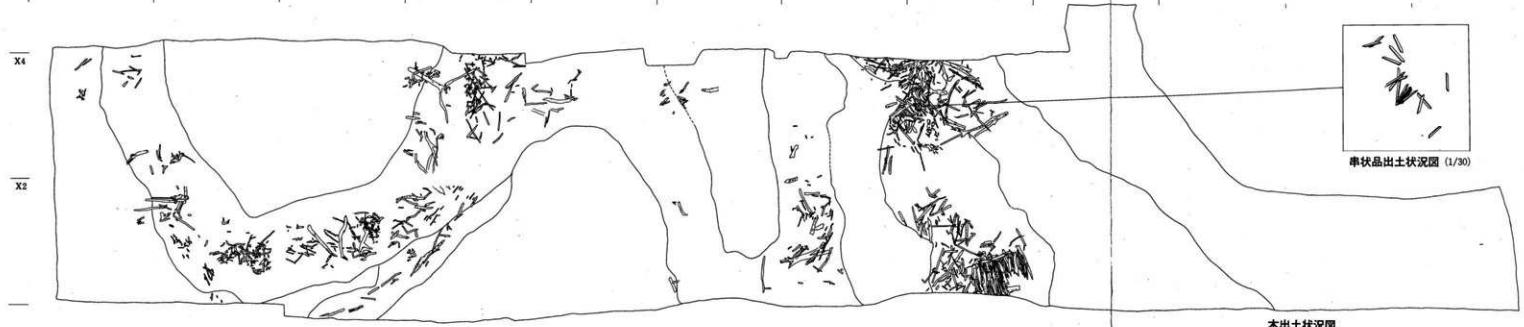
調査区の東寄りのX 1～4 Y 17区を南北にのびる浅い溝である。幅約5m、深さ70cmで、溝の西肩から7世紀初頭の須恵器が、覆土中から奈良・平安時代の須恵器・土師器が出土した。X 2・3 Y 17区では2点の人面墨書き土器が出土している。水流の方向は、調査区北端のX 4 Y 17区から南流し、X 1 Y 17区で西に強く蛇行してX 1 Y 16区から北西に流れる。そしてX 3 Y 13区で旧河道SD01内の中層に流れ込み、その東側の肩にそって南西に流れてSD02となる。

なお、X 1 Y 16・17区は南側の未調査区にも流路がのびていると考えられることから、人面墨書き土器の出土したSD03と未確認の南側流路との合流点とみることもできよう。

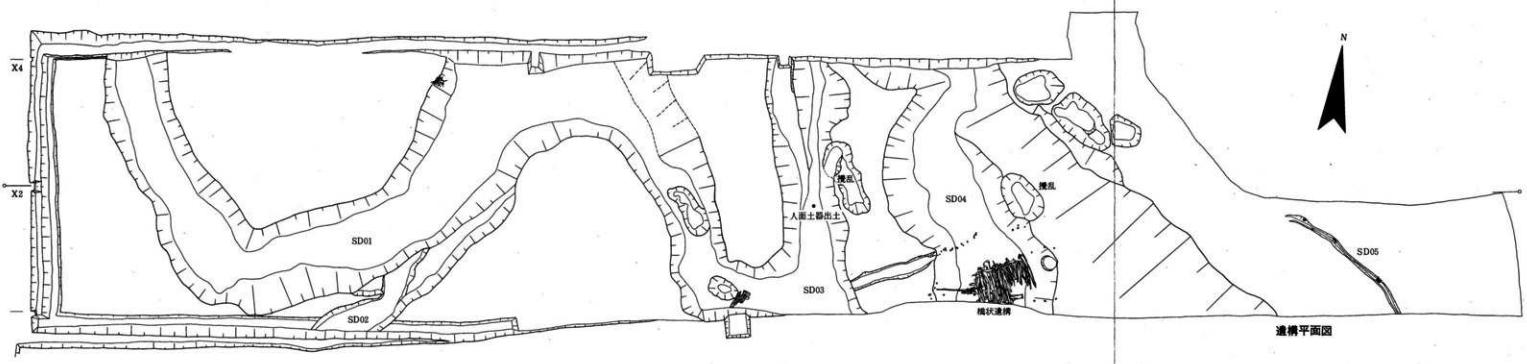
(4) SD04

調査区の東側に近い山裾に形成されたほぼ南北にのびる旧河道である。西の肩はY 19区、東の肩は調査区南端でY 21区、北端でY 20区である。最大幅約7mをはかり、東側の肩は南西から張り出した山裾の自然地形に規定されて、北西方向にのびている。堆積状況はSD01にもっとも近いが、異なるところは、東側の山裾部分の最下層に縄文時代前・晚期の土器包含層(黒色泥質土)が認められたことである。

SD04内の南端、X 1 Y 19・20区では、川跡に東西に架せられた奈良時代の橋状遺構が上層から検出された。その層位はSD01の3a層にほぼ対応し、3b層に対応する橋状遺構の土層は、植物遺体を多く含む茶褐色泥土である。橋状遺構の形成時には、その下層は泥土の堆積によって川跡はほぼ埋没し、滞流性の淀みないしむかるみ状態であったことを示す。後述するとおり、橋状遺構は自然の丸太を横に並べた「渡り場」的な施設で「橋」に近い機能を有していたと推定される。



木出土状況図



遺構平面図



遺構断面図

第4図 遺構全体図 (1/300)

0 10 20M

L : 10M

橋状遺構とは同一面で、その北西一帯から完形ないし完形に近い須恵器の杯が約20点散乱して出土した（図版4の2）。また、橋状遺構の下層の「3b層」から、橋状遺構に北接するX2Y19区で古墳時代後期の木製品が出土した（図版4の3）。同じく「3b層」から、北端のX4Y19区で古墳時代後期の土師器が出土した。「3b層」の下層以下は無遺物層で、SD01の4層～6層にはほぼ対応し、川底に至って縄文時代前期～晩期の土器片・石器が少量出土する。なお、水の流れは、山裾の自然地形にそって南西から北西方向に進み、北端は昭和57年度に検出された旧河道に達する。そして57年度調査区内でSD01の上流に合流する。

(5) SD05

調査区東端のX1Y26区からX2Y24区にかけて自然地形にそって山裾を北西方向にのびる細い溝である。幅約50cm、深さ約30cmである。溝の覆土から平安時代中期の糸切り底の土師器の杯が出土した。（岸本雅敏）

2 橋状遺構・杭列

(1) 橋状遺構（第5図）

SD04の南端で検出した。南側の一部が未掘であると、最近の擾乱により全容を知ることができないが、SD04の両端場を渡るように丸太材が整然と並べてある。そしてその両側には、杭が打ち込まれ、橋状を呈する。しかし、構造と溝内の堆積土の状況などから、一般的に言われる橋の概念とは異質の感があり、あえて橋状遺構と呼んだ。なお、遺構の説明にあたって、部材の名称等については、橋のそれに準じた。

橋状遺構の構築過程を復原的に見ると、まず、SD04の両端場に渡る朽木に相当する丸太を一本架す。それは残存で7mにも及ぶ。次に3m前後の丸太材を敷き並べ、その両端に割り材の杭を打ち込む。杭は敷き並べた丸太よりやや頭部が出るように打ち、それに接するように、丸太材が残る。この丸太材は、北側に1本のみで、残存長2.8mを測り、対する南側にも存在していたのか、あるいは橋干状に脚柱（杭）に結束されていたものは不明である。ただし、このような順序で丸太材を組み、最終的には7×3m程の長方形のプランを持つ橋状遺構が築かれたものと推察される。そして、それはSD04を十分に渡りきるものであったと考えられる。

ところで、この橋状遺構は次の模擬から流水のある溝に架せられたのではなく、沼沢地的なぬかるみに架せられた橋と考える。つまり、構造的な面からは、脚柱間が狭いこと、そして脚柱が細く、朽木上部を支え得るものではないことが上げられる。そして、SD04の覆土、すなわち当遺構下の土壌は、おだやかな堆積状況を示し、多くの有機物を含む茶褐色腐泥である。付章で吉井亮一氏が述べられるように、この土壌には、挺水性のヒルムシロが見られたり、外果皮を残すオニグルミやトチなどの種実遺体がある。これらの外果皮は、流水状態の中では残りにくく沼沢地や河跡湖などに限られるという。

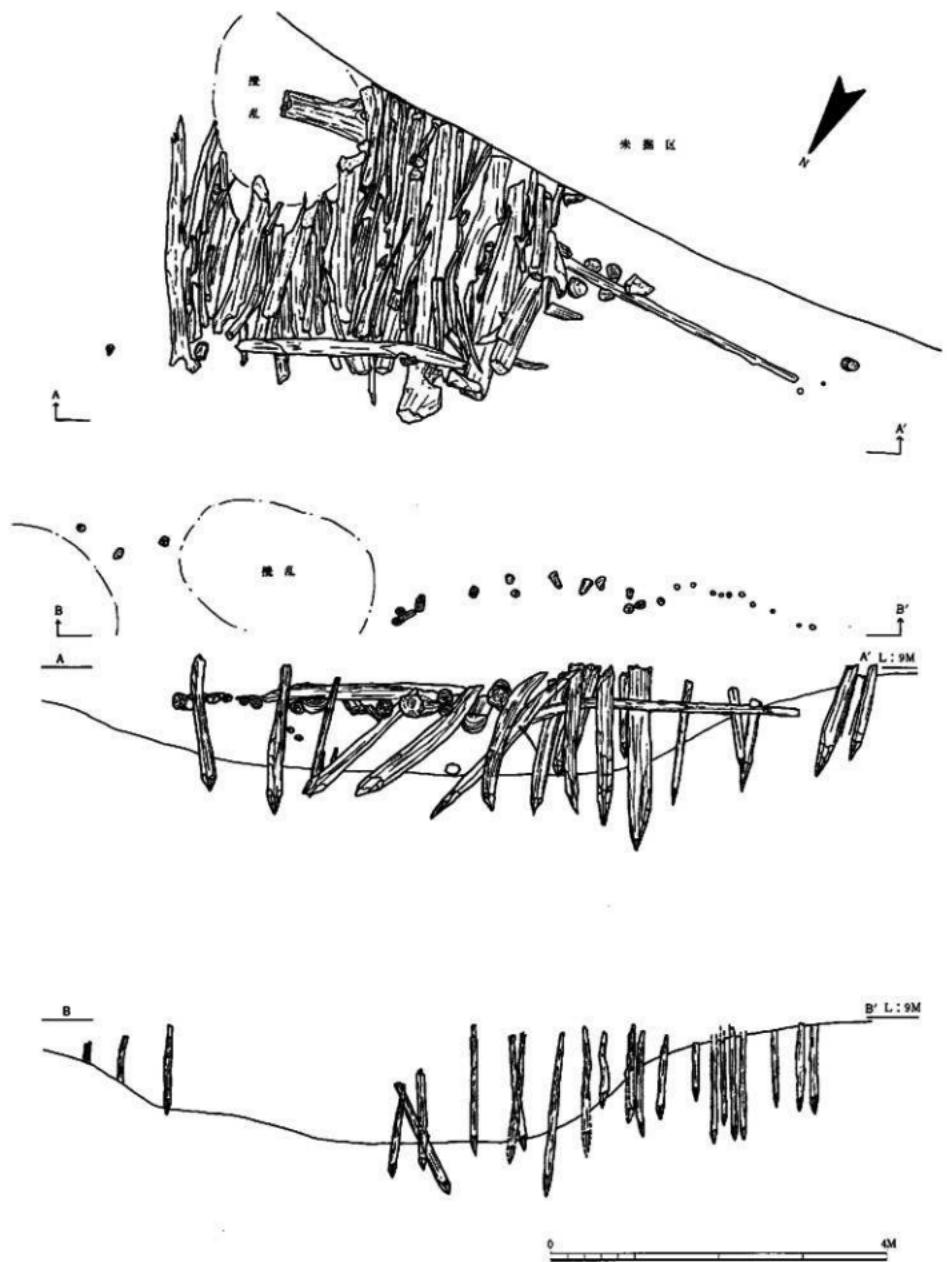
橋状遺構の構築時期については、敷き並べた丸太の間から大量の須恵器が出土しており、その年代は8世紀後半のものである。したがって、橋状遺構はこの時期に比定される。

(2) 杭列（第5図）

橋状遺構の約1m北側に、橋状遺構に平行する杭列が見られる。一部擾乱により失うが、径10cm前後の丸太杭をかなり密な間隔で打ち込む。杭の先端は、概ね水平となり、SD04の地山となる西側では、深く打ち込まれる。それとは逆にSD04の中央部では地山にわずかに達しているだけのものが多く、SD04とは無関係に打ち込まれたと考えられるものである。

杭列の西側延長上には浅い溝が続き、杭列との関連性を窺わせる。この溝からは、珠洲焼の小片が出土しており、杭列も珠洲焼以後の造作である可能性が強い。したがって、橋状遺構との関連性はなく、むしろ橋状遺構が埋没してから打ち込まれたものと考えられる。

（間清）



第5図 橋状遺構・杭列実測図 (1/60)

III 遺物

1 繩文時代

繩文時代の遺物には土器と石器がある。川跡の最下層から出土するものが多いが、奈良・平安時代の遺物に混じって上層からも一部出土している。

(1) 繩文土器 (第5図)

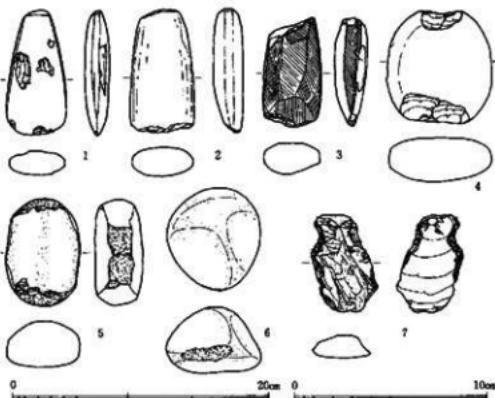
1は口縁部に縱方向の粘土紐を貼り付け、この間に繩文原体を押圧したもの。2も同様で、横方向と、短く縱に原体の端部を押圧する。3は口縁端部外側に先い抉りを施している。4は連続爪形文をめぐらす。5は波状の突帯を貼り付けて、縱方向の連続刻みを加えるもので、東海地方の人海II式に類似しよう。6は小型の盃で、外面には細かな連続刺突、底面にも連続爪形文が密に施される。7・8は同一個体。胴上半部でややくびれる器形で、くびれ部に一束の爪形文をめぐらせて、上部に半截竹管によるコンパス文、下部に繩文を施文する。9は斜縄文の上に幅広の沈線を斜めに引いている。10は鋸歯状沈線を2条めぐらす。11は半截竹管文を口縁部に平行に引き、小破状口縁の波頂部には、半截竹管文端部をコンパス状に回転させた円形文を施文する。12は無地に斜方向の沈線を、13は斜縄文を施文する。14~17は羽状縄文である。17は口唇部に繩文を押圧する。

18~20は同一個体。器形は円筒状の平縁深鉢で、口縁端部がわずかに外方へ開く。胴上半部から口縁部にかけて5条の沈線を引き、やや広くとった2区画に斜縄文を充填する。口縁部と幅の狭い2区画は磨り消して一部に縱方向の短い沈線を引く(20)。胴下半には、上半部とは異方向の斜縄文が施文される。21は口縁部がやや内湾する器形で、渦巻状沈線と平行沈線がみられる。22はやや外方へ開く波状口縁の深鉢で、口縁直下に2条の沈線がめぐる。24は口縁部が内傾し、三叉文と細かな充填縄文がみられる。25は口唇部にサンゴ状突起を有する浅鉢形土器である。一部に丹塗の痕跡が残る。内外面とも丁寧な磨きが施される。26は口縁部が短く立つ壺形土器である。口唇部には斜めの刻みを入れ、頸部に2条の沈線をめぐらせる。27は半壺状文と横方向の細かな条痕がみられる。30は口縁部が外反する鉢形土器。器壁は非常に薄く、焼成は良い、胴部には牛半彫の低平な隆帯がめぐり、4か所に中央が窪む菱形の突起を貼り付ける。1~17の土器は、5が早期末と考えられる他は、前期前葉に位置づけて良いだろう。18~20は後期中葉である。

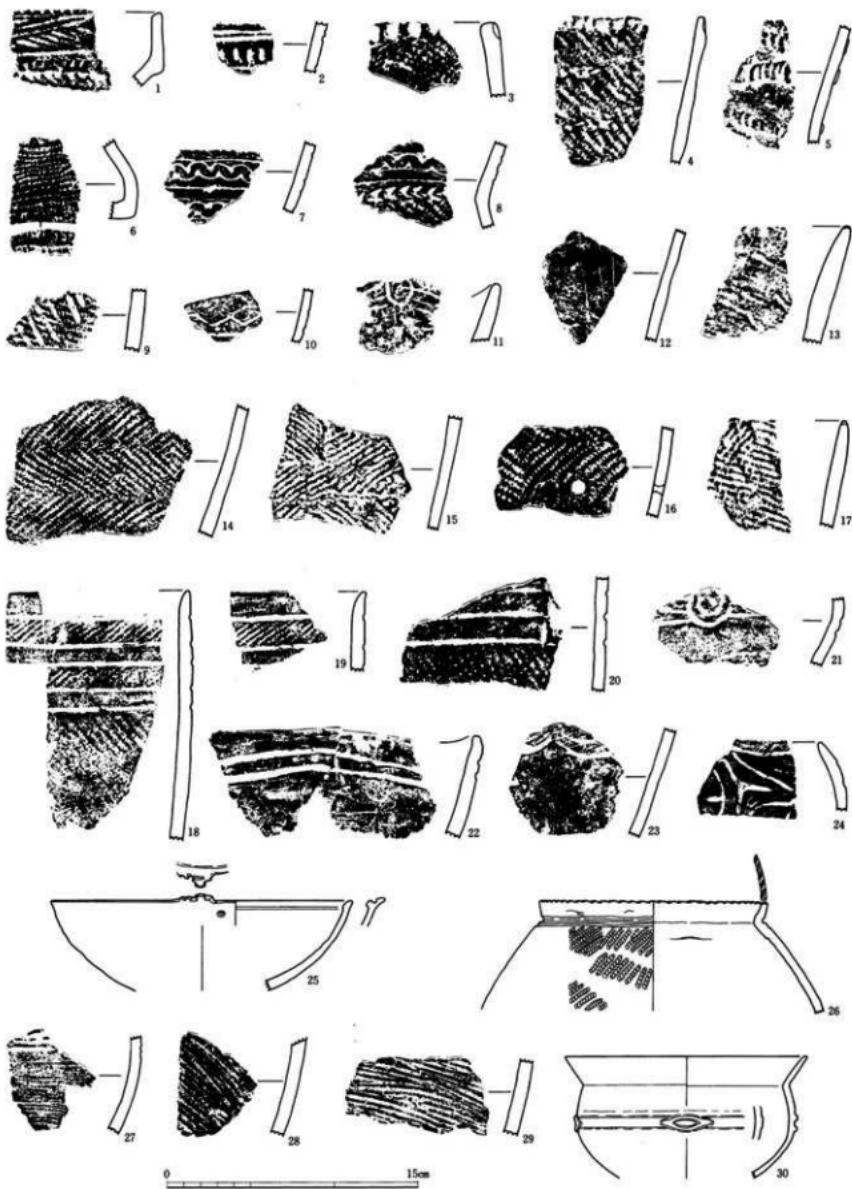
24~30は晩期前葉で、24は御経塚式、25~30は中屋式に比定できる。

(2) 石器 (第6図)

1は砂岩製の磨製石斧。2は表面風化し、石質も不明。刃部は破損が著しく、やや片刃になるところから再成したものと思われる。3は蛇紋岩製の磨製石斧で基部を欠損する。4は花崗岩製の打ち欠き石錐。重量は413gの大型のもので、前期前葉に属すると考えられる。5・6は叩き石で、潰滅痕が縁辺の全周にみられるものと一部のみのものがある。7は鉄石英を用い、簡単なつまみを作り出した石匙である。加工状態からみて未成品かもしれない。(山本正敏)



第6図 石器実測図 1~6(1/4), 7(3/8)



第7図 土器拓影・実測図 (1/3)

2 古墳時代

古墳時代の遺物には、土師器・須恵器・玉類・木製品がある。そのうち土師器がもっとも多く、その大部分はSD01内の3b層から出土した。SD01内では、調査区の西寄りのX1・2Y7・8区とX2・3Y12区との2ブロックから集中して出土した。なお、少量みられる弥生時代終末期の土器についても、この節であわせてとりあげる。

(1) 土 師 器 (第8~10図)

器種には壺・壺・高杯・碗・鉢・手づくね土器がある。これらの器種は、昭和57年度調査時の出土遺物にすべてみられるものである。また型式的にもそれと同じものが多い。器種別にみると高杯の占める率の高いことが注目される。

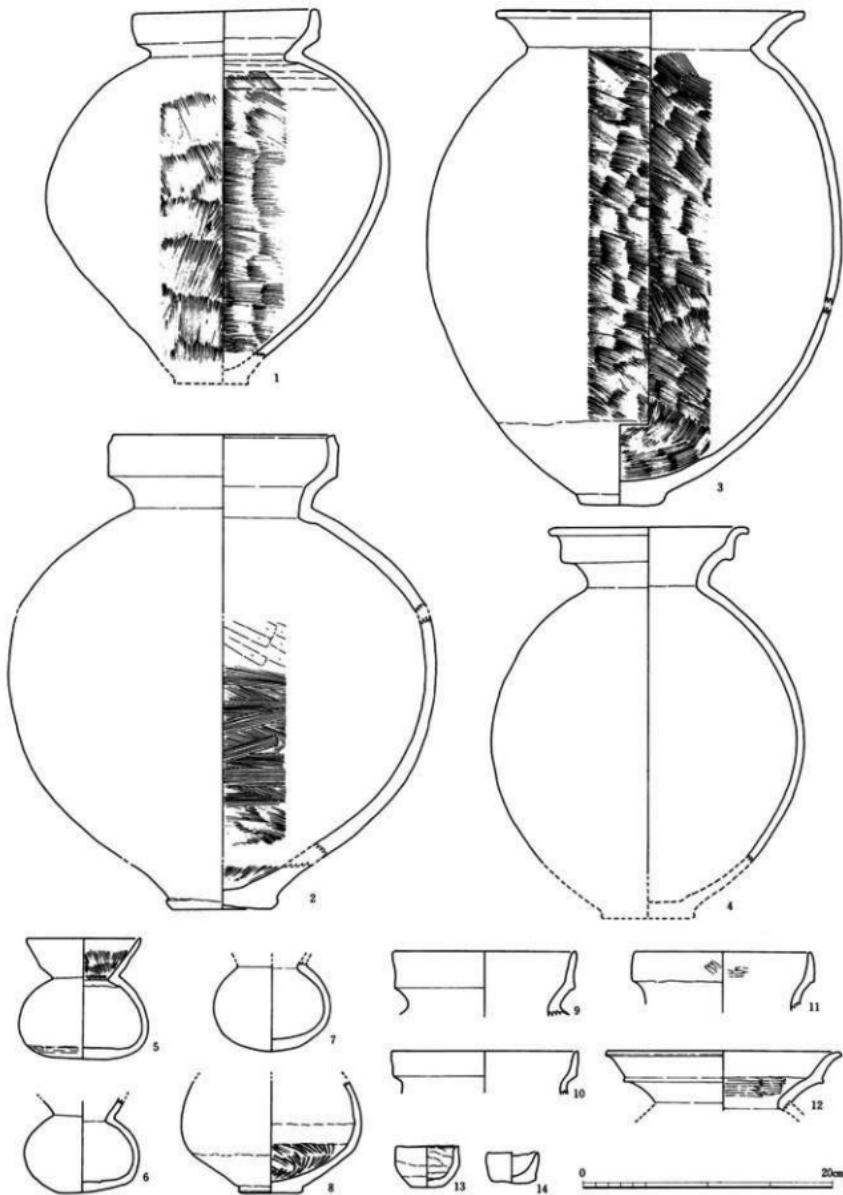
壺(第8図) A~Gの7種にわけられる。壺Aは有段口縁をもち、II縁部は頸部から外反し上段がほぼ直立する(1・2、9~11)。細部においては、口縁が直立する1、やや内傾する11、やや外傾する9・10、口縁端がわずかに内傾する2などの差異がある。口径17.8cmの2のような大型品とII径15cm前後のもの(その他)との2種ある。1と2はII径は異なるがともに厚手である。1は内外面をハケメ調整する。1は器高約30cm。2は器高38cmで胴部は玉ネギ形を呈する。出土区は、1:X1Y11、2:X4Y5、9:X1Y7、10:X2Y19、11:X2Y8である。

壺Bは有段II縁をもち、直立に近いII縁部上段の端部が強く外反する(4)。口径16cm、推定器高約31cmで胴部は玉子形に近い。X2Y11区出土。壺Cは頸部からくの字形に強く外反するII縁部をもつ(3)。II径24.6cm、器高39cmで、底部は平底である。内外面をていねいにハケメ調整する。X1Y8区2b層出土。壺Dは有段口縁をもち、頸部から強く外反して、上段もさらに外反する(12)。段は凸帯状の段となる。口縁部の内面下半を横方向にヘラミガキする。口径は18.8cm。X2Y6区3層出土。壺Eはいわゆる小型丸底壺と称されるものである(5~7)。完形の5はII径9cm器高9.6cmである。口縁部の内面をハケメ調整する。出土区は、5:X1Y11、6:X1Y15、X1Y9区である。壺Fは壺の胴部下半が遺存する(8)。内底面とその上部をハケメ調整する。壺Gは手づくね土器を一括した。13はII径5cm、器高3.4cmで外面に粘土紐の接合痕を、内面には指ナデ痕をとどめる。13はX1Y9区3a層出土。14はX3Y17区出土。

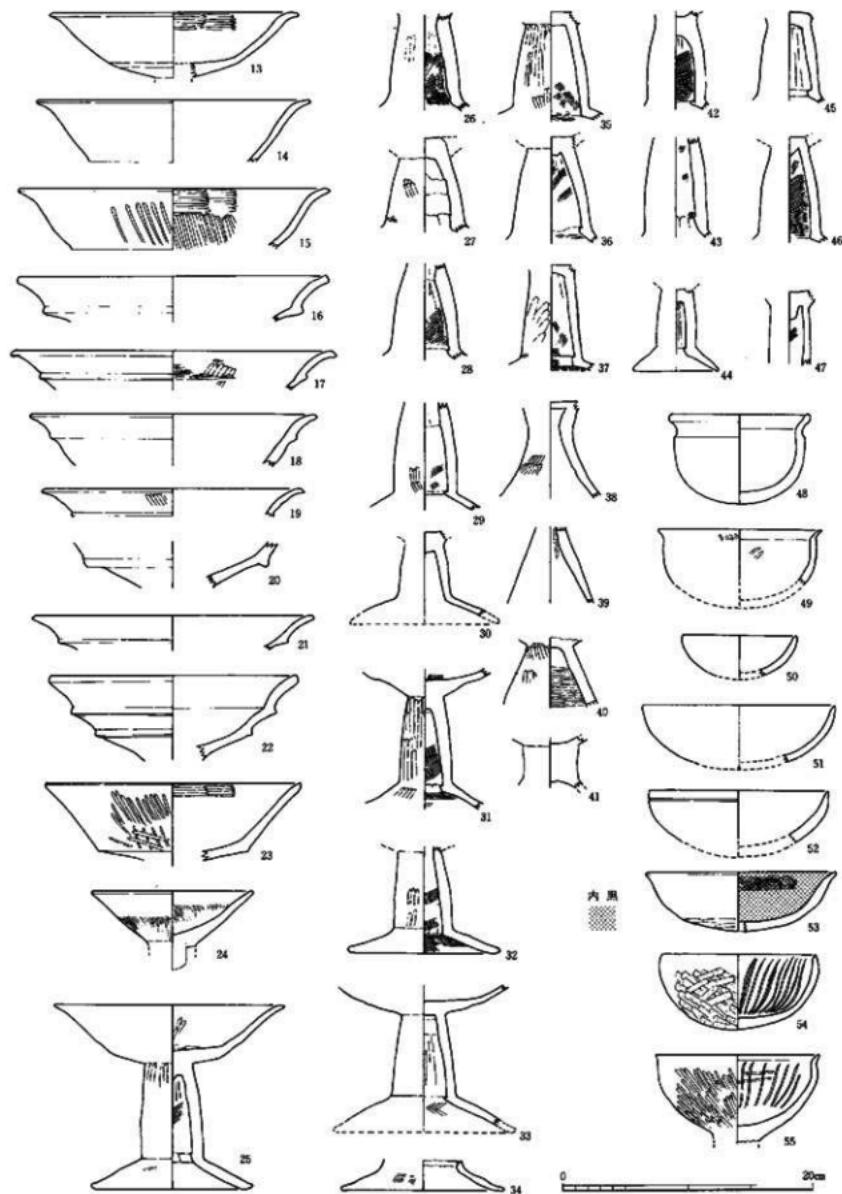
高杯(第9図13~47)。出土した内、余器形を窺うるものは少ない。以下、杯部と脚部にわけて述べる。杯部A(13~15)はその下方にわずかな棱をもつ。15は外面をヘラミガキする。杯部16~21は、その上部に凸帯状ないしそれに近い段をもつ。杯部C(22)は、凸帯状の段を2段もち、やや特異である。杯部Eは筒状の脚部上端から逆八の字状に直線的に外方へのび、段をもたない(24)。完形の25は上記の杯部Aとしたそれをもち、筒形の脚部の下端にハの字形に外方へのびる脚端部をもつ。杯部の口径18.4cm、器高14.8cm。X2Y12区出土。

脚部は2種にわける。もっとも多い脚部A(26~33、35~37、42~46)は、筒状の脚部の中ほどあるいは下方がわずかにふくらむ。外面をヘラミガキ、内面をハケメ調整するものが多い。脚部Bは下端に向かってラッパ状に広がる(38~40)。出土区は、36がX2Y17区(SD03)、38がX2Y19区(SD04)、41がX3Y17区(SD03)で、他はすべてSD01内である。なお22は遊離。

椀(第9図48~55)。杯形ないし鉢形のものをひとまず一括する。48は小壺とすべきかもしれない。短い口縁部は頸部でくびれて外反する。II径11.4cm、器高7.2cm。X4Y5区出土。49は口縁端がわずかに外反する。口径13cm。X1Y8区出土。50~52の3点は丸い底部から内寄ぎみに立ちあがる。50は口径9cm、器高約3.5cm。X1Y17区(SD03)出土。51は口径13.4cm、器高約5.4cm。II縁端に近い外面に1条の沈線をもつ。53は内面黒色土器である。内面はヘラミガキする。X1Y19区(SD04内)出土。54は内面に放射状暗文に近いヘラミガキを施し、外面は口縁部を除いて全面を不定方向にヘラケツリする。口径12.2cm、器高6cm。X1Y19区(SD04内)出土。55は台付の碗で内面に放射状暗文に近いヘラミガキを施し、外面は全面をヘラミガキする。SD04内出土。41は台杯椀の脚部である。



第8図 土器実測図 (1/4)



第9図 土器実測図 (1/4)

壺（第10図56～66） 壺Aはくの字形に外反する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる（56～58・60）。口縁部は内外面を横方向にナデる。56のみは外面をハケメ調整する。胴部は内外面をハケメ調整するものが多い。口径18cm前後である。出土区は、56：X 2 Y 8、57：X 2 Y 6、58：X 2 Y 7、60：X 2 Y 11区で、いずれもSD01内である。

壺Bは頸部から立ちあがりぎみにのびる口縁部をもち、口縁端が強く外反する（62）。口縁部は内外面ともナデ、胴部は外面をハケメ、内面をナデる。口径17cm、X 2 Y 21区（SD04内）出土。壺Cは壺Aと同じく口縁部がくの字形に外反し、口縁端部の外面を面どりする（59、63～65）。胴部の外面をハケメ、内面をナデる。出土区は59：X 2 Y 10、63・64：X 1 Y 7、65：X 1 Y 8区（いずれもSD01内）である。壺Dは口径26.6cmの大型品で、外反する口縁部は中ほどから強く外傾する（61）。壺Eは壺Aの口縁端が肥厚し、さらに外傾する（66）。X 3 Y 12区出土。

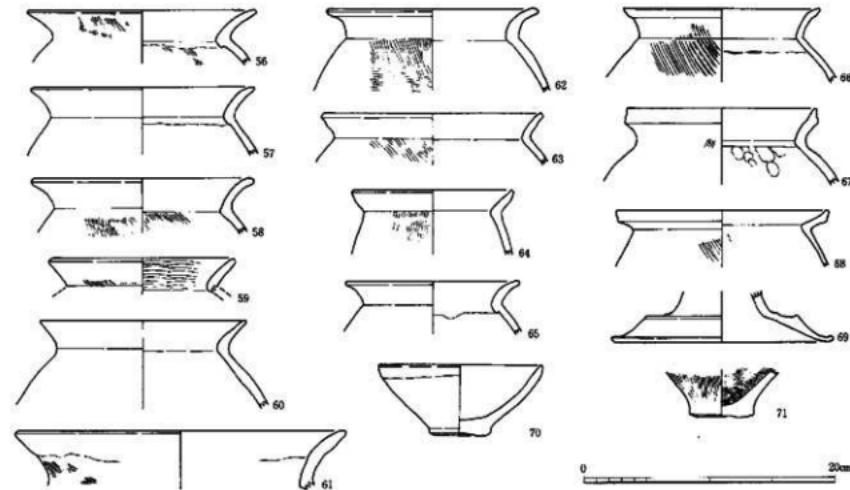
鉢（第10図70） 口径13cm、器高6cmで、杯形を呈する。蓋とみる考えもあるが鉢としておく。X 2 Y 8区出土。

土師器の編年的位置 以上の土師器は、出土層位と土器型式から大きく2時期にわかれる。一つはSD01内の3b層の出土土器で、須恵器を伴わない（A群土器）他の一つは主にSD01内の3a層とSD04内のそれに対応する層から出土したもので、古式の須恵器を伴う（B群土器）。前者が大部分を占め、後者が少量加わる。

点数の少ないB群土器を抽出すると、碗48～55である。黒色土器の碗53、暗文状のヘラミガキをもつ54・55はいずれもSD04の北端からまとめて出土している。54・55に類似するものは、小矢部市道林寺遺跡の第3号住居跡出土資料にみられ、そこでは古式須恵器が伴出している。この遺跡でも、後述する古式須恵器（第11図81・82）が出土しており、これに伴うものと考えられる。その年代は5世紀末ないし6世紀の初頭におくことができる。台付碗の脚部41や杯Aの13、ラッパ状に開く脚部Bもほぼ同時期のものであろう。

A群土器は、吉岡康暢氏による北陸地方の土師器編年〔吉岡1966〕では、その第3様式と第4様式の中間に位置づけられている石川県の高座遺跡〔中村1978〕に近い。その土器は高畠遺跡の土器と金丸「宮地式」との中間に置かれ初期須恵器出現の直前のものである。しかし、すでに池野正男氏が指摘した〔池野1983〕ように、A群はそれよりもやや先行するようである。

なお、第10図67・68・71は弥生時代終末期の壺で、後二者はSD01の川底出土。



第10図 土器実測図 (1/4)

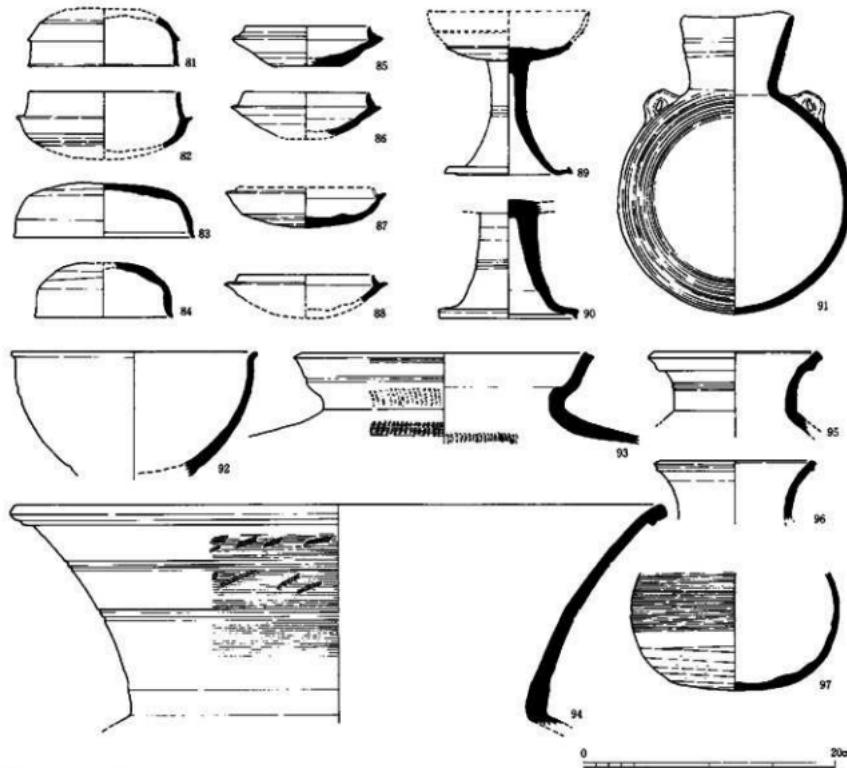
(2) 須 惠 器 (第11図・12図)

古墳時代の須恵器は、主としてSD01内の3a層から出土し、SD03・04内からも少量出土した。器種には杯・蓋・高杯・提瓶・盞・甌・鉢がある。

盞 (第11図81-83-84) 杯蓋81はいわゆる古式須恵器で、天井部の三分の一を丁寧にヘラケズリする。天井部と口縁部との境界は突出して鋸い棱をなす。口縁部と稜線部の径はともに12cmで、口縁部は直立する。口縁端部の内側には段があり、したがって稜線をもつ。頂部は欠損しているが、復原器高は約4.5cmである。SD01内3a層出土。

杯蓋83は口径14.4cm、器高4.3cmで、杯蓋としては大型である。天井部と口縁部との境には段をもたず、わずかな稜線をへだてて連続する。天井部をヘラケズリする。口縁端部の内面に段をもつ。X2Y15区 (SD03内) 溝底出土。蓋84は口径11cm、器高4.3cmで、83と同じく口縁部と天井部との境には段をもたない。口縁端部はわずかに外側に折れる。天井部をヘラケズリする。X3Y21区 (SD04内) の3層出土。

杯 (82・85~88) 82のたちあがりはやや内傾し高さ2cmである。端部の内側にわずかに内傾する面をもつ。受部は外方へ直線的にのびる。口径12cmで推定器高は約5cmである。外底面は受部近くまで丁寧に回転ヘラケズリする。X1Y7区 (SD01内) 3a層出土。杯85~88は胎土・焼成・型式ともに近似する。内傾する短いたちあがりをもつ。



第11図 土器実測図 (1/4)

口径10cm前後、器高3.5cm前後である。85はX 2 Y 11区（S D01内）、86・87はX 1 Y 17区（S D03内）出土。

高杯（89・90）ともに無蓋高杯と考えられる。脚部には2条の沈線をもつ。透しはない。S D01内3a層出土。

提瓶（91）器高26.3cm、口径9.4cm。口縁端は丸くおさめる。口縁部の外面に2条の沈線をもつ。体部の両側に環状の耳がつく。体部の前面に同心円状のカキ目を施す。X 2 Y 7区（S D01内）3a層出土。

壺（95～97）95・96は口縁部の破片である。95は口縁端の外面が肥厚し稜をもつ。X 2 Y 19区（S D04内）溝底出土。97は体部の破片である。外面の上半をカキ目調整し、下半を回転ヘラケツリする。S D01内3a層出土。

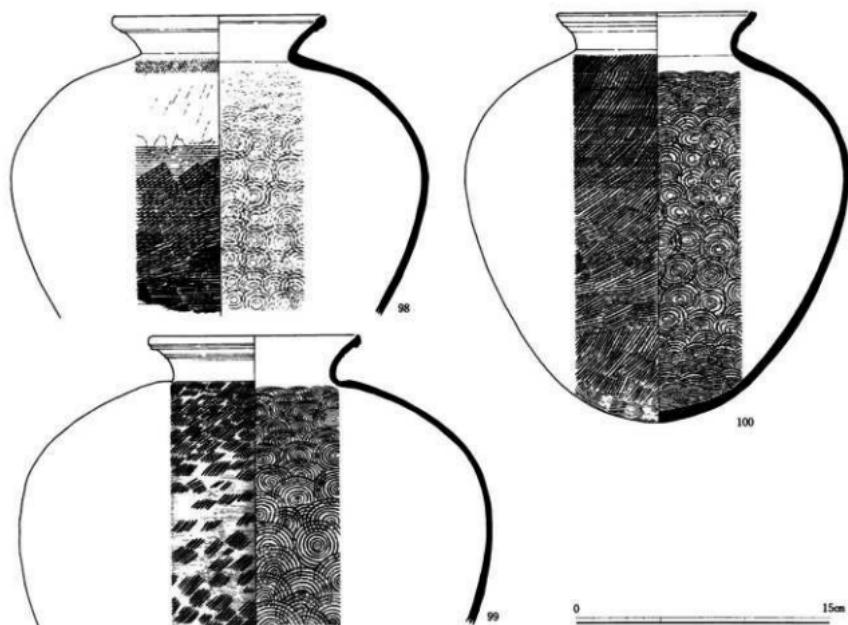
鉢（92）口径19.4cm、器高約10cmの大型品である。椀形を呈し口縁端がわずかに外反する。S D01 3 a層出土。

甕（93・94・98～100）93は口径22cmの中型甕の口縁部である。94は口径52cmの大型甕の口縁部。外面に2条からなる沈線を2段にもち、その間をカキ目調整する。逆ハの字形に外反する口縁部は端部を外面に折りかえし肥厚する。

98～100はともに中型の甕である。98は口径25cm、体部的最大径49.6cm。99は口径24.8cm、体部的最大径56cm。100は口径24cm、器高48.5cm。体部内面にみられる同心円状アテ具痕には亀裂痕が認められる。

須恵器の編年的位置 出土須恵器の中で最古のものは蓋81と杯82である。田辺昭三氏による須恵器編年[田辺1966]のTK208型式ないしTK23型式に近似し、5世紀末のものである。また短いたちあがりをもつ杯85～88や蓋84はそのTK217型式に近く、7世紀初頭のものである。脚部に透しをもたない高杯89・90や甕93・94・98～100もおそらくそれに近い時期であろう。口縁部の内側に段をもつ蓋83や環状の耳をもつ提瓶91は、それらより古く、6世紀の後半ごろのものであろう。

(岸本雅敏)



第12図 土器実測図 (1/4)

(3) 五類・その他 (第13図101~105)

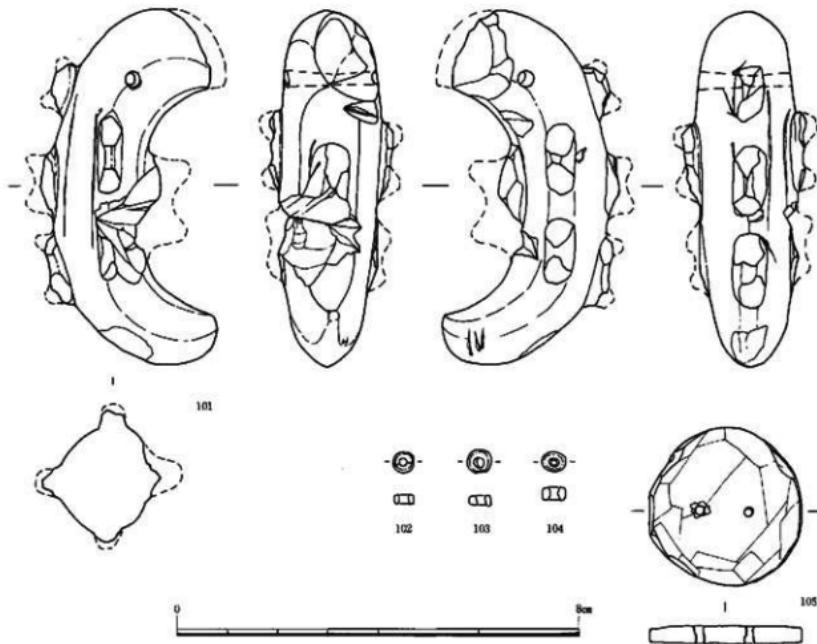
子持勾玉・白玉・有孔円板がある。これらはいずれも原位置を遊離しており、土器との共伴関係は不明である。子持勾玉はSD04の西側端場で最近の擾乱を受けた層位から単独で出土し、白玉と有孔円板は、SD01の古墳から平安時代に至る各期の土器が混在する3層上面から集中して出土した。この3層上面は砂質土で平安時代以降の川底と考えられるもので、SD01の流路の中では最も新しい時期のものである。

子持勾玉(101)、全体に磨滅が著しく各所に破損が見られる。三日月状を呈し、頭尾は尖る。断面は円形である。子の形状は、その全てが一部を欠失し、全容を窺い知ることはできない。子は腹部に1個、背部に3個、胴部にそれぞれ2個の計8個が削り込まれている。頸部の穿孔は両側から行なわれ、紐ずれなどの痕跡は認められない。滑石製で灰緑色を呈する。全長7.1cm。

白玉(102~104) 102と103は滑石製、104はガラス製品である。いずれも径4~5mm厚さ2mm位であるが、ガラス製のものは梢円形を呈し、やや厚めである。

有孔円板(105) 滑石製で径3.1cmの円板に2個の孔を持つ。孔は両面から穿たれ、円板片面は縁辺部が良く磨かれ凸レンズ状になる。

これらの遺物は目前に述べたように年代の決め手を欠くが、古墳時代祭祀遺物の範疇でとらえられるものであり、とりわけ、子持勾玉や有孔円板は、県内では数少ない滑石製品の出土例である。 (間 清)



第13図 玉類・有孔円板実測図 (1/1)

3 奈良時代

(1) 土器

(a) 須恵器 (第14~16図)

須恵器の器種としては、杯蓋・杯・高杯・壺・横瓶・鉢・甕などがある。分類に際しては、平城宮調査報告〔奈文研1962他〕を参考に、器形の違いをA・B・C…で、法量差をI・II・III…であらわすことにする。

杯蓋 (第14図1~9) 杯蓋は、偏平な宝珠形もしくはボタン状のつまみの付くAと、つまみの付かないBがある。杯蓋Aは、頂部からなだらかに山笠状に開く器形のもの(3・5)、端部近くを横に引き出すもの(2)、偏平な器形のもの(4)などがある。端部の形状は、逆三角形で下端がやや外方に向くものが比較的多いが、丸く終るものや、やや高く立つものの変化がみられる。天井部はロクロナデ調整のものが圧倒的に多く、ヘラケズリのみられるものは、全体の1~2割程度である。口径からA I (18.5~21cm)・A II (15.5~18cm)・A III (12.5~15cm)・A IV (10.5~12cm)に分類しうる。杯蓋Bは7の1点のみ確認されており、時期は平安時代に下る可能性がある。

杯 (10~42) 無高台のAと高台の付くBに大きく分類できる。杯Aはさらに、II径14.1cm器高3.1cmのA I (25)と、口径11.4~13.2cm器高3.1~4cmのA II (26~32・35・36・38~42)、口径12.3~12.6cm器高2.4~3cmのA III (33・34・37)に分けることができる。出土量はA IIが最も多く、A IIIが次ぎ、A Iは非常に少い。例外なくヘラ切りのみられる底面は平坦なものが多く、ロクロナデ調整される部はやや直線的に伸びる。杯Bは高台の付くもので、口径15cm、器高5cmのB I 、II径13.8~14.4cm器高6.6~6.7cmのB II (10・11)、II径10.4~13.8cm器高3.1~4.6cmのB III (12~24)に分類できる。B Iは図示していないが、体部に沈線が1条めぐるものである。底部はヘラ切り後高台を貼り付けており、体部の調整は10の外面下部にロクロケズリがみられる他はロクロナデである。高台の形状は、外方に開くもの、細くてやや高めのもの、接地部分が高台内側にあるもの、同じく外側にあるもの、高台貼り付け位置が底部と体部の境近くになるもの、やや内側にめぐるものなどかなりの変化がみられる。

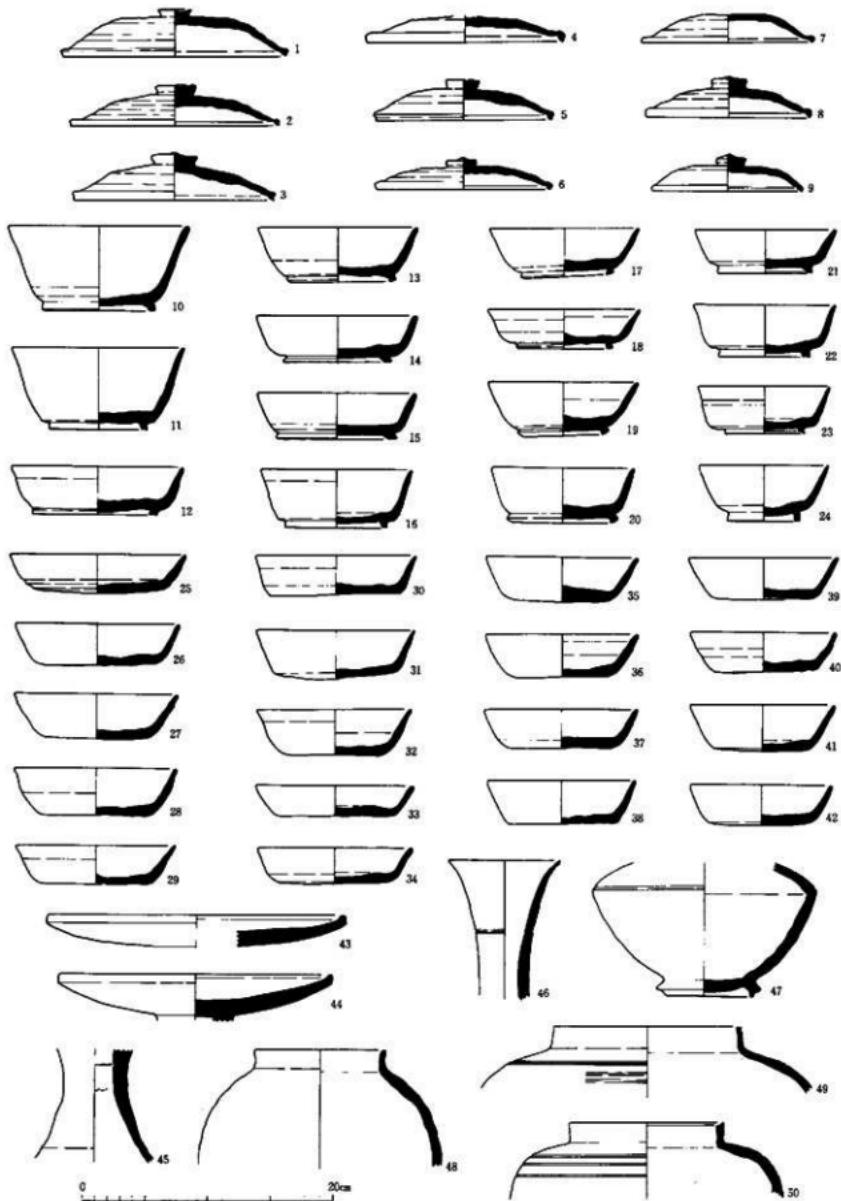
高杯 (43~45) 口径22~24cmの杯部に、透し孔のない脚部が付く。口縁端部は丸く、立ち上りはわずかである。杯部外面はヘラケズリを行っている。色調は灰褐色~赤褐色を呈し、酸化焰焼成に近い。

壺 (46~54) いわゆる長頸壺のA (46・47)、短頸壺のB (48~52)、小型壺のC (53・54)に大まかに分類できる。46は、壺Aの口縁部で中ほどに沈線が1条めぐられる。47は鋭く屈折した肩部に沈線が1条めぐり、体部外面は底部まで丁寧なヘラケズリがなされる。壺Bはさらにいくつかの形態のものがみられる。50は肩部に3条の沈線をめぐらす有蓋短頸壺。48は内外面ともロクロナデでなく肩になる。52はやや肩が張り、51は口縁端部内側が肥厚し、肩下間にタタキが残る。壺Cとした53は、口縁部が強く外方に開き、端部が少し立ち上る。54は肩が鋭く屈折し、1条の沈線がめぐる。

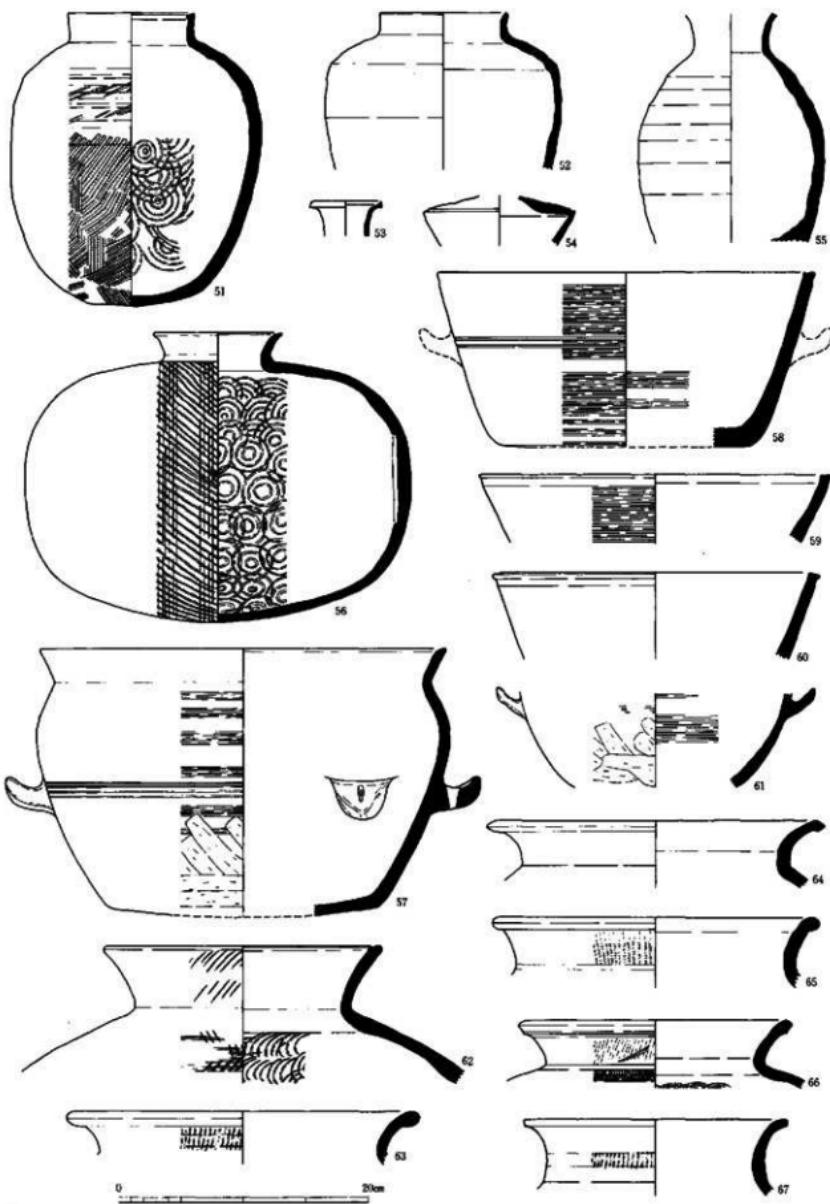
横瓶 (55) 体部長推定31cm、器高約23cmの大きさで、外面には平行タタキの後にカキメ、内面には同心円タタキが施される。

鉢 (57~61) 平底になるA (57~60)とやや丸底風のB (61)がある。Aはさらに頭部で屈曲するもの(57)と口縁部が直線的に開くもの(58~60)に分かれ。いずれも体部の2か所に把手が付き、体部外面上半はカキメ、下半はヘラケズリ、内面はロクロナデもしくはナデで調整する。57・58には体部外面中程に数条の沈線がめぐる。

甕 (62~69・71・72) 口縁部の形態と口径にかなりの変化がみとめられる。62は口径22cmで、口縁部が直線的に外方に開く。63~66は弧状に外方へ開き、端部が肥厚する。67は同じく弧状に開くが、端部の肥厚はない。62・63・65~67の口縁部は、ロクロナデで調整しているが、平行タタキの痕跡が残る。68は、II縁端部の内側をわずかにつまみ出す。69は小型の甕で、器壁も薄い。71は、わずかに外傾する口縁部にやや偏平な球形の体部がつく。体外面に



第14図 土器実測図 (1/4)



第15図 土器実測図 (1/4)

は格子状のタタキとカキメ、内面には同心円のタタキがみられる。72は倒卵形の体部となり、体部上半は内外面ともカキメを施し、下半部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキとなる。

以上の他に器種不明の70がある。これは全形を知ることのできる資料にめぐまれていないが、小杉流団No16及びNo18C遺跡〔上野他1982〕に類例がある。愛知県猿投窯跡群高巣寺2号窯出土品〔愛知県教委1983〕にあるような、体部に透し孔のある台状の器形になろう。

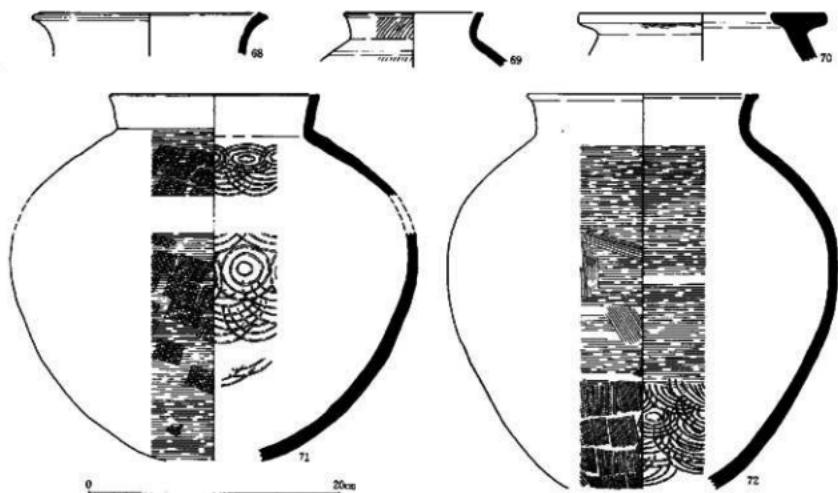
(b) 土 師 器 (第17図)

器種としては、杯・壺・鍋・蓋・底部有孔土器などがある。

杯 (第17図83) 83は、口径15.4cm 器高5.4cmの大きさで全面赤彩されている。底部はヘラ切り、体部下半はヘラケズリがみられる。体部は腰で折れて、口縁部は直線的に伸びる。1点のみ出土。

壺 (73~82) 法景からⅠ~Ⅳ類に分類できる。壺Ⅰ類は、全形を復元できたものはないが、口径17.5~20.8cmの大きさで、いわゆる長胴型の器形になると考えられる。口縁部から体部上半部にかけては、ロクロナデとカキメで調整する。Ⅱ類(76)は1個のみ出土している。口径18cm器高10cmで、底部は丸底に近い平底である。体部内面と外面上半部はロクロナデ、同下半部と外底面はヘラケズリを行う。内外面とも煤状炭化物の付着はない。北陸地方で一般的に認められる小瓶の壺は、高径指数が100前後からそれ以上のものであり、本例のように指數56を示すものはほとんどない。Ⅲ類(77・78・81・82)は、口径が12.3~13.5cmで、外反する口縁部にややふくらみをもった体部が続く。内外面には煤状炭化物が付く。体部内外面をロクロナデで調整するものが多い。Ⅳ類(79)は、口径9.8cm 器高8cmのもので口縁部が強く外反し、端部が少し立つ。体部のふくらみは少なく丸底に近い平底となる。体部内面及び口縁部はロクロナデ調整し、体部外面から底部にかけてはヘラケズリを施す。内外面とも煤状炭化物が付着する。80は壺Ⅲ類の底部で回転糸切りが残る。壺の底部に回転糸切りが残るものは他に2点あるが全体的にみて量は少ない。

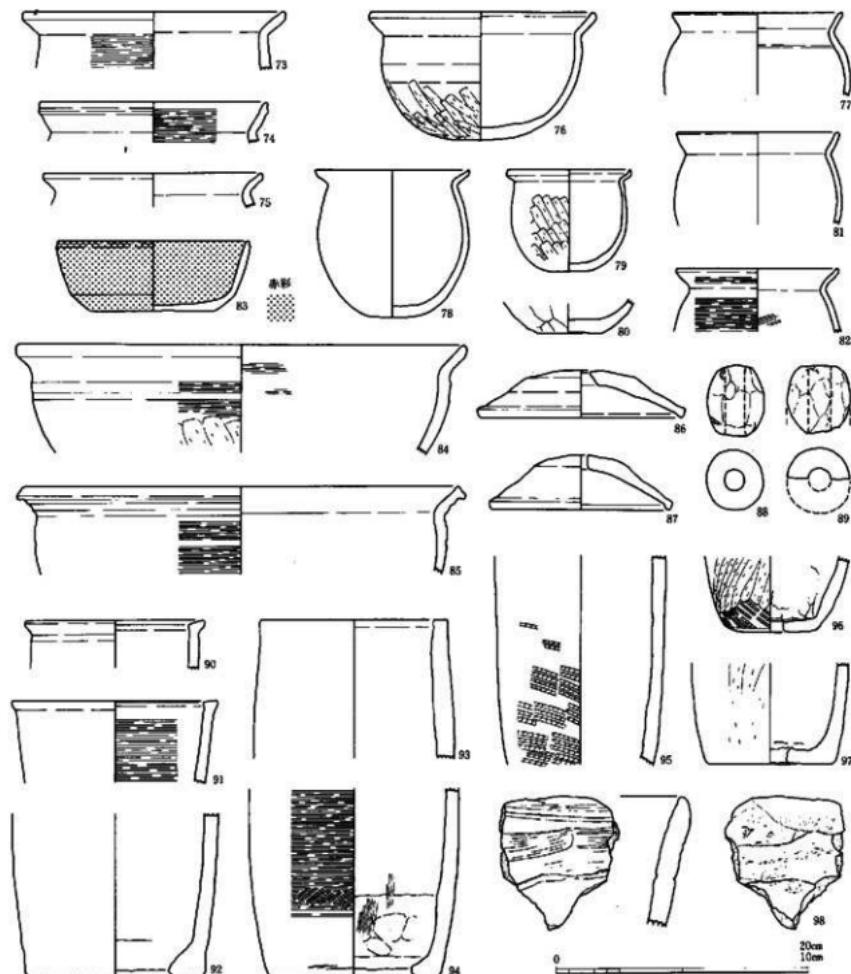
鍋 (84・85) 口径約36cmで、端部のつくりはややまるみをおびるものと、面取りして斜め下方へ少し引き出すものがある。口縁部はロクロナデ、外面はカキメの後にヘラケズリを行う。



第16図 土器実測図 (1/4)

蓋 (86・87) 蓋AとBがある。蓋Aは須恵器の杯蓋と同形態のものである。小破片のため図示していないが、端部は下方へほとんど折れずに、まるくおさまる。外面とも赤彩される。蓋B (86・87)は、口径14.6~16.4cm器高3.8~4.4cmで、大井部中央には焼成前の穿孔がみられるものである。頂部から山笠状に開き、端部はややまるみをおびた逆三角形状である。外面ともロクロナデした後、部分的に不定方向のナデを加える。他に類例を知らないので、一応蓋に分類しておく。

底部有孔土器 (90~97) 口縁部がわずかに外側にふくらむものと直口のものがある。体部はほとんど変化のない円筒形で、底部には焼成前に孔を設けておくものである。これは、孔の大きさと製作手法からA・Bの2類に分ける



第17図 土器・土製品実測図

73~97(1/4), 98(1/2)

ことができる。A類(92・93)は、あらかじめ底部はあけておき、体部下端の内側に断面三角形の凸帯状のものを貼り付ける。B類(96・97)は、普通に底部を製作後、中央に直径2~3cmの孔を割りぬくものである。

(c) 小 結

上器の組成をみると、供膳形態及び貯蔵形態は須恵器が、煮沸形態は土師器が占めており、機能分担は明確である。ごくわずかに供膳形態に赤彩土師器があるが、日常的なものではなく、祭器として用いられたものであろう。このような土器組成は、北陸地方の奈良時代集落跡に普遍的なものである。この土器組成の中の土師器で、従来あまり注意されなかった器形のものが含まれていることは注目されてよい。特に、口縁部が肥厚する台状のものは、狼投廻跡群や石川県辰口町サクラマチ第3号窯跡【高橋1975】にあり、底部有孔土器は、砺波市高沢島1号窯跡【神保1978】・流田内遺跡群などから出土している。今後、その用途や分布・時期などを明らかにしていく必要がある。

次にこれら土器群を、須恵器を中心に周辺の窯跡群と対比してみる。まず大型の杯蓋AⅠ~Ⅱ・体部に沈線のめぐる杯BⅠ・壺A・C・同Bのうち有蓋のもの、横瓶などは、西方800mにある小杉窯跡N16窯跡1・2号窯出土の須恵器に類似する。また口徑のやや小さい杯蓋AⅢ~Ⅳや杯A・高杯・壺Bのうちなで肩になるものなどは、前者より新しい段階に位置づけられるよう。特に多量に出土した杯Bをみると、流田N16窯跡に比べ、口径が1cm程縮小し、底部のまるみは消えて平底となり、口縁部がわずかに外反していたのが直線的に開くなど、新しい様相を呈している。高杯の口縁端部の立ち上がりが、流田N16窯跡の高杯より低くなることも新しい要素のひとつとしてよいであろう。

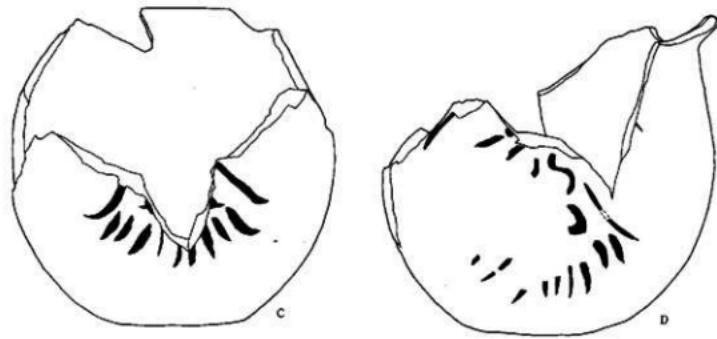
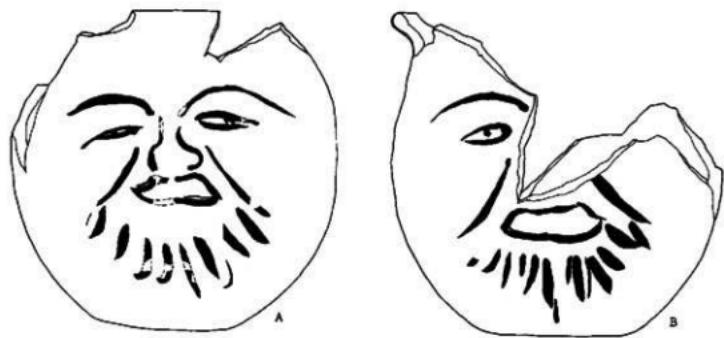
以上のように、これらの土器群は、AD730年前後に位置づけられる流田N16窯跡に対比できるものを含み、主体を占めるものはこれより新しい段階のものとみられ、下限はやや不明確である。遺跡の性格上、ある程度の時期幅を考える必要もあり、一応実年代については、8世紀後半期から9世紀初頭にかけてのものと推定しておきたい。

(2) 人面墨書き土器 (第18図99・100)

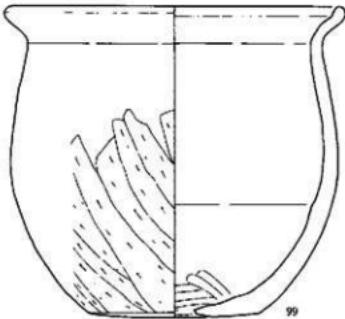
X2Y17区の清(SD03)の覆上及び下底面と、溝西側の肩の部分から2個体分出土した。99は、口径13.5cm器高12.4cmの小型土師器壺である。外反する口縁部は、端部がまるく、内側にやや肥厚する。体外面下半と外底面はヘラケズリされ、体部上半と内面はロクロナデ、内底面はナデている。底部には直径約1.5cmの焼成後穿孔がみられる。焼成は良好で、この器種に普遍的にみられる煤状炭化物の付着はない。人面は4面に墨書きされている(A~D面)。A面の残りが最も良く、B面では左目・左眉と鼻を欠く。C面では額の中心部を欠き、ひげと口の一部がわずかに見える。D面では墨痕のかすれがひどく、顔の造作はやや不明瞭である。顔の表現・筆づかいなどをみると、これら4面が同一人物の手によるものと判断される。表現法をみると、顔の輪郭や頭髪は表現しないようである。眉は一筆で弧状に長く引き、目は二筆で輪郭を描いて目玉は点で表現する。鼻は、下側面がまるく左右対称形に近い。開いた口は5~6回に分けて線を引き、その両側には鼻の両側から伸びる線がみられるが、歯を表現したものであろう。あごひげは11の下側に放射状に広がる。特にB面では太い線と細い線が混在し、方向もやや乱れていることから、一部の線は後から書き加えた可能性が強い。

100は、口径12.1cm器高4.6cmの須恵器杯Aである。底部をへら切りし、他はロクロナデで仕上げる。焼成はややあまい。人面は体部外側の3か所に墨書きされる(A~C面)。A面では左目を欠く。B面は右眉を欠くうえ、全体に墨痕の残りが悪く、特に左目は形状が不明瞭である。C面は額の上半部がかなり失われており、左目・鼻・口の一部が残る。顔の表現法をみると、A及びB面では額の両側に破線を描いている。これは、顔の輪郭か、あるいはあごひげから続くもみ上げを描いたものであろう。C面ではこの表現はみられない。眉は一筆で引き、目は二筆で輪郭を描く。目玉は点もしくは短線であらわす。鼻は、A面では土師器壺の人面と同様2本の曲線で下側面を丸く表現しているがB面では鼻すじを1本短く引き、小鼻を両側に弧線で描いている。口は二ないし三筆で輪郭を描く。A面の口から横に伸びる線は口ひげをあらわすものであろう。

(山本正敏)



0 15cm



第18図 人面墨書き土器実測図 (1/2)

(3) 木製品 (第19~23図)

今回の調査で得られた木製品の総数は、237点である。内訳は表2に示すとおりである。紙面等の関係から、図示したのは68点にすぎないが、一応、成品と見做し得るものは網羅してある。ただし、橋状遺構の部材である杭などについては省略し、総点数にも含めていない。なお、樹種同定は行なっていないが殆んどが針葉樹で広葉樹と認められるものは、わずか3点にすぎない。

これら木製品の多くは、SD04の3層より出土し、その状況は自然木などの在り方から見て、押し流され堆積したものと考えられる。SD04の3層は、砂層を境として二分される。すなわち、砂層上面は奈良時代後半の堆積土であり、下層は古墳時代後期となり、前者を3a層、後者を3b層と呼ぶことにする。木製品の中には、この両層にまたがって出土するものがあり、時期比定できなものがあることから、ここでは明らかに層位が確認できたものについてのみその旨を記すことにする。また、図中の断面に示した木理は、木取りを明確にするために概念的に表示したものである。

土木材 (47・48・53)

いずれもSD03から出土した矢板である。47は表裏とも割り面で、片面を削り落して欠板に仕上げる。残存長111cm、幅25cm。48は裏に割り面を残し、表から削り欠板に仕上げる。残存長97cm、幅31cm。53は、小型のもので、残存長53cm、幅11cm。SD03は人面墨書き器が出土した川跡であり、これら矢板も同じ層位から出土している。しかし、この層位からは、古墳時代から平安時代に至る各期の土器が混在しており、時期比定は不可能。

建築材 (49)

49は堅木取りの極目板。板の一端を削り出し、径2.5cmの円形の柄状の突起を作る。板の片面は中央部からぞがれ薄くなる。残存長106cm、幅17cm。この他に図示しなかった巨大な板1枚がある。一端に抉り込みがあり、側縁にそって小さな孔が3個見られる。法量は238×27.4cm。堅木取りの極目板。

食膳具 (7・63)

7は木皿である。堅木取りの厚板を削り込み皿に仕上げる。磨滅が著しく、明瞭な調整痕は見られない。推定口縁部径18cm。63は四脚付盤。一部を欠くが、口縁部で28×25cm、底面で16×17cmの方形である。器高6cmで、底部木地の厚さは2cm。底面の炭化が顕著。

紡織具 (62・67)

62は檣である。半截した木を台形に整え、頂部に長方形の枘穴を穿つ。枘穴には角柱が残り、上部は欠損する。裏面は枘穴に向けて方錐状に削り込まれる。底面形は24.5×24.5cmの正方形となり、頂部までの高さは8cm。角柱の残存長は4.5cm。

檣については、乙益重慶氏の考察がある。氏は千葉県生遺跡より出土した方形台状品について、その詳細な観察から「角孔に樹立した棒の上部で、何らかの作業が行われたと解すべき」とし、福岡県沖ノ島二十二号祭祀遺跡出土の金銅製錦形品や三重県鳥羽市神島八代神社などの金銅製神宝に傍証を求められ、檣と推察される[乙益1980]。当遺跡出土の檣は、乙益氏の指摘を補強するものと言える。3b層から出土しており、古墳時代後期に比定される。

67は編板と考えられる。板の一辺に鋸歯状の刻みを持つ。残存長22cm、幅3cm。県内では上市町江上A遺跡〔久々1984〕などに例がある。

容器 (9・10・66)

9・10は、曲物か桶の底板である。9の推定径15cm、10は13cm。両者とも極目板。66は桶の側板と考えられるもの

土木材	矢板(3)
建築材	板(2)
食膳具	盤(1)・皿(1)
紡織具	檣(1)・編板(1)
容器	曲物(4)
武具	弓(1)
祭祀具	刀形(2)・車串(串状品)(55)
不明品	板・棒・木屑・角材など(171)

表2 木製品内訳 ()は数量

で、外面はていねいな削りが施される。やや湾曲するが怪を推定できるものではない。長さ23cm、幅8cm。

武具 (52)

S D03から出土した丸木弓である。二つに折れて別々に出土したが、層位、木質、形状などから同一個体と認めた。弾は両側からていねいに削り出される。芯持ちの広葉樹で弹性がある。残存長58cm、中央部の径2cm。

祭紀具 (1~3・11~16・18~46) (第Ⅳ章2参照)

刀形木製品・斎串・串状品などがある。これらは当遺跡を特徴づける遺物の一つであることから、別に項を設けた。

用途不明品 (4~6・8・12・50・51・54~61・64・65・68)

棒状品 (5・6・50・54~61) 5は中央部に4つの小さな孔を持つ。全長14cm。6は両端を削り、有頭状に作る。50・55~60は断面を円形に仕上げた棒である。53と61は先端部を方形に整えたり、細く作ることから、何らかの柄とも考えられる。

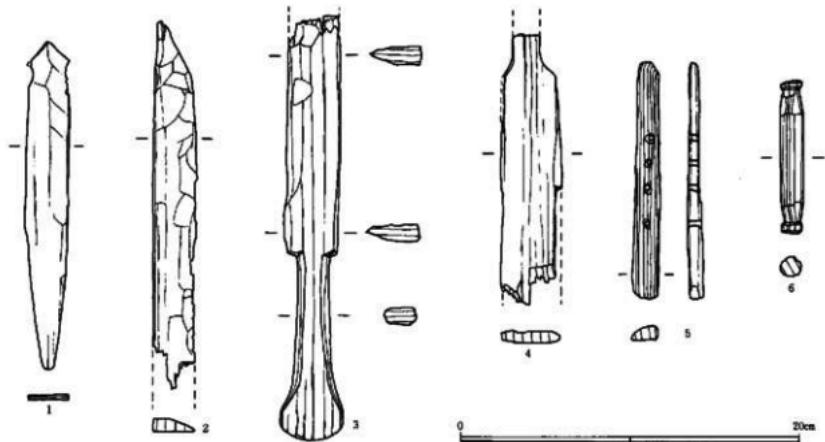
板状品 (4・8・11・12・17) 4はヘラ状を呈する。残存長16cm。8は不整な半月状の板に径1cm程の孔を5箇所に穿つ。蓋とも考えられる。11と12は一端を尖らせる。17は薄い板の両端に1mm程の小さな孔が穿たれる。端部は丸く削られる。全長25.1cm。

角材状品 (64・65・68) 64は角材の一端を斜に切ったもので、全長23.5cm。65は端部を柾木状に削り出すものである。建築部材とも考えられる。全長21.2cm。68は一面が割れているため全体の形状は不明であるが、抉り込みが見られる。65同様に建築部材とも考えられる。

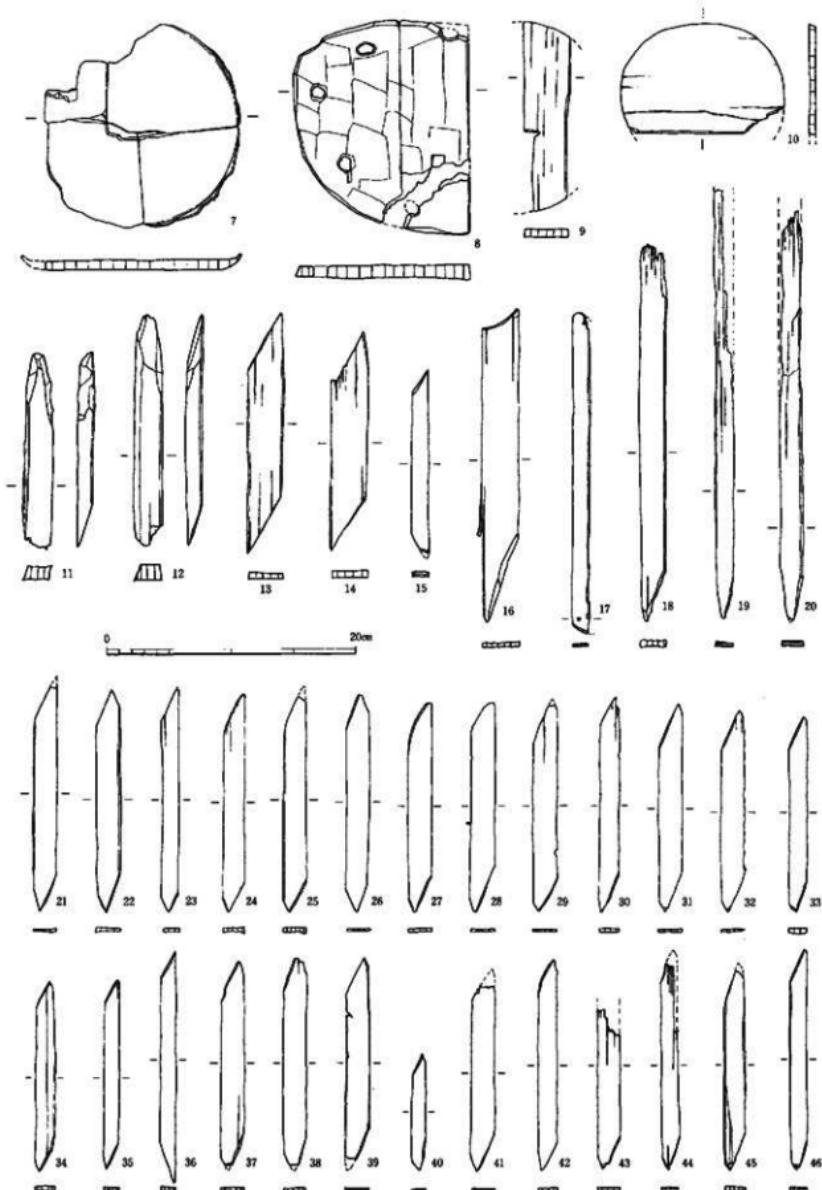
有孔板状品 (51) 58×37cmの板の一端から斜めに抉りを入れ、その先端を丸く仕上げる。板の縁辺にそって径1cm程の孔を穿つ。大きな孔は腐朽によるものである。抉りの両翼に厚く削り残す部分があり、図示面の左側には、断面V形の溝が掘り込まれる。この溝には、別の板材が残り、それはこの溝の上部から差し込まれた状態である。そして、溝の上端からクサビを打ち込み、固定している。また右側では、縁にそって直線的な段が見られる。これらのことから当品は、何らかの組まれた成品の部材であることは確かであるが、管見では例がない。

51はS D04から出土し、その層位は3b層で、第9図54の椀と共に伴した。したがって、その年代は古墳時代後期に比定される。

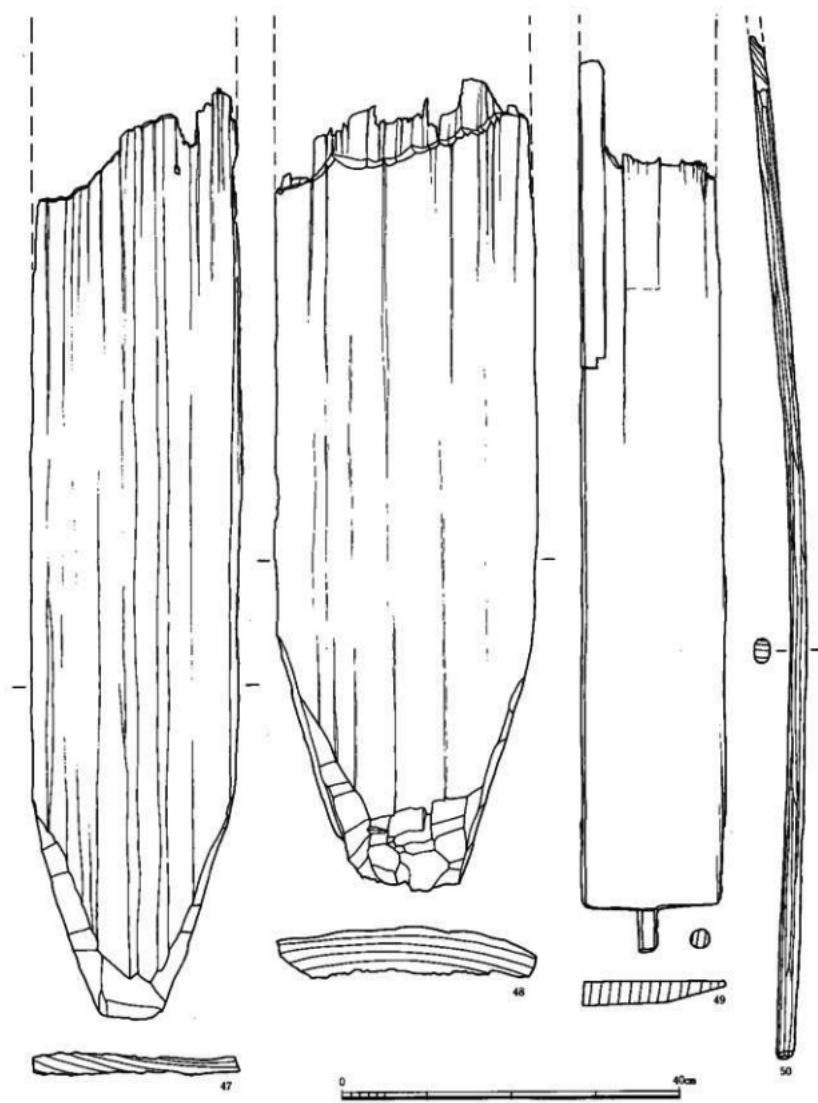
(間 清)



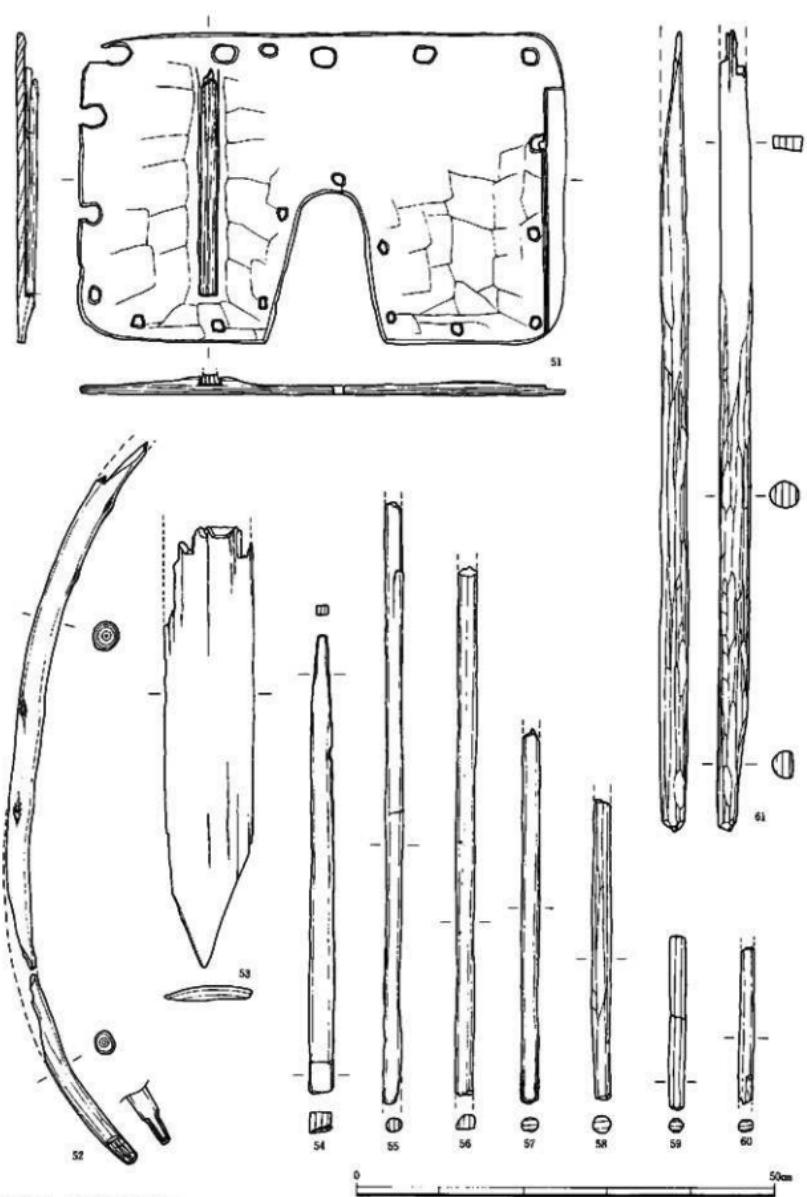
第19図 木製品実測図 (1/3)



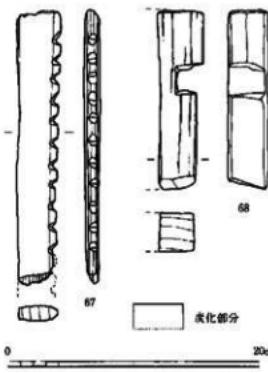
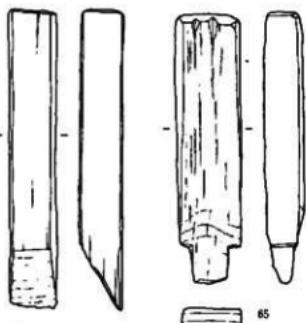
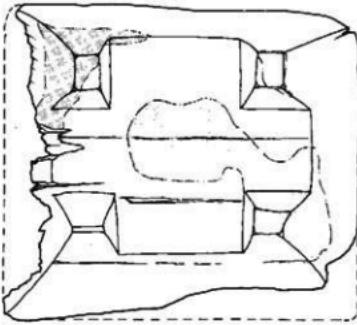
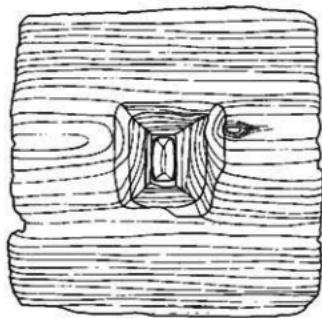
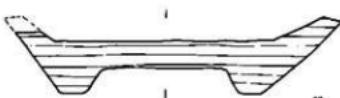
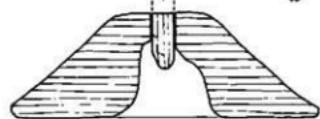
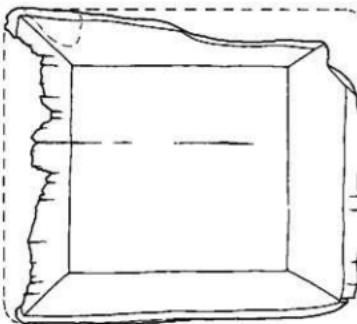
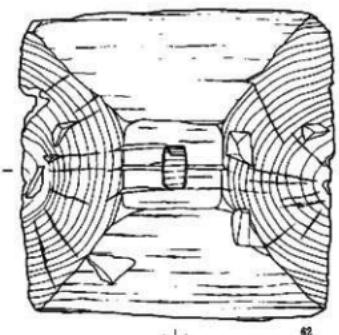
第20図 木製品実測図 (1/4)



第21図 木製品実測図 (1/4)



第22図 木製品実測図 (1/4)



第23図 木製品実測図 (1/4)

4 平安時代

平安時代の遺物は、土師器が主体を占め、X I Y16・17区及びX 4 Y13・14区の溝の覆土からある程度まとめて出土している。

(1) 須 惠 器 (第15図55・第25図46)

確実に平安時代としるる須恵器は少ない。奈良時代の須恵器としたものの中に一部含まれている可能性があるが、現段階では分離しきれなかった。第15図55は、底部と口縁部を欠く壺である。内外面ともロクロナデで調整する。第25図46は、杯もしくは皿の底部で、高台はあまり高くなく、断面はまるみをおびる。

(2) 土 師 器 (第24図1~39・第25図40~45・拓影)

器種としては、杯・皿・壺がある。

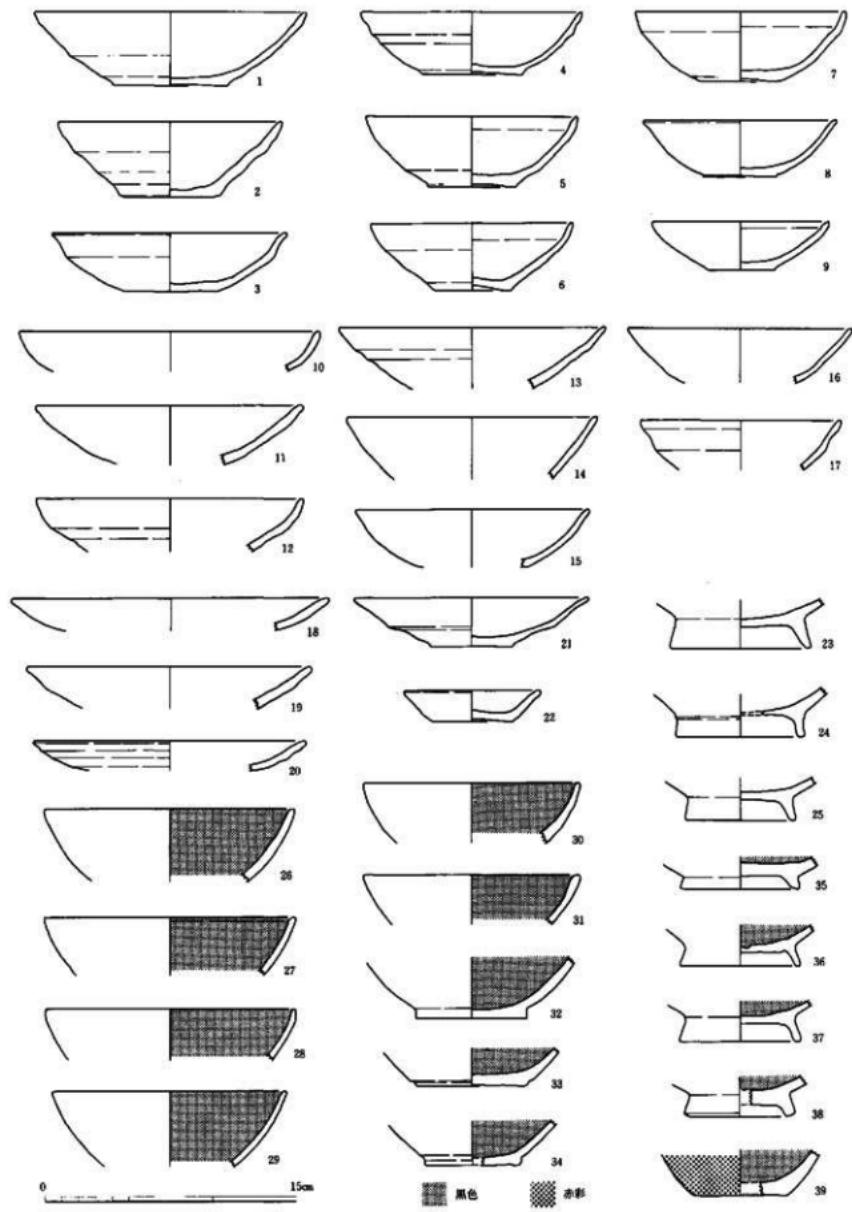
杯 (1~17・23~25) 無高台のA (1~9) と、高台の付くB (23~25) に大きく分かれる。10~17は、II縁部のみの破片で、底部に高台が付くかどうか不明であるが、とりあえず杯Aに含めて報告する。杯Aは、法量差によつて、口径15.8~17.9cmのA I (1・10~13)、同13.8~15.0cmのA II (3・14・15)、同11.5~13.6cmのA III (2・4~8・16・17)、同8.8~11.2cmのA IV (9) に分類できる。全体的に薄手の作りのものが多く、体部はロクロナデで調整し、底部は回転糸切りによる切り離しとなる。口縁部はやや内弯しながら立ち上るが、直線的に開くもの (11・14・16) や、外反するもの (3) などもある。4は体部の一部が灰色を呈しており、部分的に還元焰焼成となるようである。なお底部糸切り回転の方向は、底部側を見て、黒色土師器杯も含めてすべて逆時計回りとなる (第25図下段)。高台の付く杯Bは、杯Aに比べて量はかなり少なく、全形が復元されたものはない。底部回転糸切り後、足高の高台を貼り付ける。高台の形状は、23・25がやや外に開き、24は真すぐに伸びる。

皿 (18~22) 形態からA・Bの2類に区分できる。皿Aは、体部が浅い傾斜で長く外方に開くもので、II径15.2~18.9cmのA I (18~20)、同12.4~13.9cmのA II (21)、同9.2~10.4のA IIIに分類できる。体部はロクロナデ、底部は回転糸切りによる切り離しとなる。21は、体部中位でわずかに折れて、口縁部は外反する。皿B (22) は一点のみ出土。底径に比べて口径が大きく、体部の長さは短い。器面調整は皿Aと同じである。

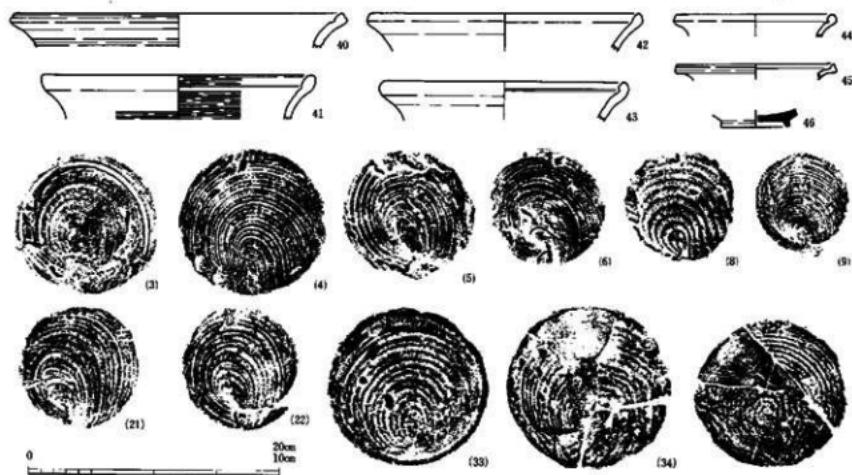
壺 (40~45) 全形を復元できるものはない。器形は、奈良時代の土師器壺と基本的には同じである。相違点は、外反する口縁の端部の形状で、平安時代のものは、内側に曲げて巻いたり、肥厚させ、あるいはさらに上方へ曲げたりする。壺は、法量差からI~III類に分類する。I類 (40) は口径約27cm。40は口縁部内外面をロクロナデで調整する。II類 (41~43) は、II径20~22cm。41の内面及び体部外面にはカキメ調整、42・43はロクロナデ調整がみられる。III類 (44・45) は、口径13cmのものである。I・II類はいわゆる長胴型の壺、III類は高径指数が100前後の小型の壺になろう。

(3) 黒 色 土 器 (第24図26~39)

杯 (26~39) 無高台のA (26~34) と、高台の付くB (35~39) がある。杯Aは、法量差からA I~IIIの3類に区分できる。A I (26~29) は、口径13.9~15.6cm、A II (30・31) は口径11.6~12.9cm、A IIIは口径10.4cmのものである。外面はロクロナデ、内面はヘラミガキ後、黒色処理がなされる。体部はゆるく弧状に立ち上り、II縁部は、土師器杯に比べて傾きが小さい。底部は回転糸切りによる切り離しとなる。底部と体部の境に、段をもつもの (32) や、浅い沈線が一束めぐるもの (33・34) などがある。杯Bは、高台の形状に変化がみられる。35は断面が逆三角形に近いやや低めの高台が付く。高台内側及び外底面も黒色を呈する。35・36は、薄手で足高の高台が付く。38の高台はやや低めで端部が角ばる。39は無高台の杯であるが、外面には丹塗がみられ、全体に厚手の作りとなっている。時期は奈良時代にさかのほる可能性がある。



第24図 土器実測図 (1/3)



第25図 土器拓影・実測図 41~47(1/4), 底部拓影(1/2)

(4) 小 結

前記の土器群について、その編年的位置づけを中心にまとめておきたい。土器組成は、土師器を主体とし須恵器がわずかに伴う。これは当遺跡の特性として、奈良時代の須恵器が大量に混在していて、平安時代の須恵器の抽出が困難であったことを考慮するにしても、前段階に比べて須恵器の占める割合が減少してきていることを示すものと考えられる。主体を占める土師器は、杯・皿類を中心に壺類が伴っている。杯・皿類には、量的にはやや少ないが、黒色土器を含んでおり、さらに足高の高台のつくものもみられる。これらの特徴をもとに、県内の平安時代の土器群と比較してみる。まず、9世紀代から一部10世紀初頭に位置づけられる入善町じょうべのま遺跡〔高島他編1974〕出土土器と比べてみると、無高台の土師器杯Aの形態はあまり差異がないが、当遺跡では器高の低い皿類や足高台の付く杯Bがかなりみられ、須恵器の割合が少ないなどの特徴がある。距離的なへだたりもあり、地域差を考慮するととも、当遺跡の土器群は、じょうべのま遺跡出土の土器群に後続する段階に位置づけて良いと考えられる。

次に下限については、大体平安時代後期とされる福光町古館遺跡出土の土器〔舟崎1975〕に比べてみると、小型の皿類が少ないと、形態的なへだたりが大きいことなどからより古い段階に置く必要がある。また須恵器の壺(第15図55)は、愛知県猿投窯跡群の黒笠89号窯出土品〔愛知県1980〕に類例があり、黒笠90号窯式として10世紀前半に位置づけられている〔愛知県1983〕。この形態の壺は、富山県内の窯跡からの出土例がなく、形態的に近似することから猿投窯からの搬入品である可能性がある。

以上の検討をもとに当遺跡の土器群の実年代を推定すると、ほぼ10世紀代に位置づけることができよう。

5 その他の遺物

(山本正敏)

その他の遺物には、フイゴの羽口・鉄滓・土鍤・製塙土器・中近世の陶磁器(珠洲焼・越中瀬戸焼など)がある。第17図98は、製塙土器のII縁部破片で、他に数片ある。胎土に砂粒を多く含み暗褐色を呈する。器形は平底になるものと推定される。土鍤(第17図88・89)とともに、平安時代のものであろう。鉄滓はかなりの出土量があるが、いずれも磨滅している。

(山本正敏)

IV まとめ

1 川跡の形成と埋没－南太閤山Ⅰ遺跡A地区の変遷－

今回の調査で検出された川跡・溝の土層と遺物のあり方から、川跡の形成と埋没過程を人間活動との関わりにおいて素描してみたい。それに先だら、まず川跡の立地する地盤層の形成過程について簡単にふれておこう。

(1) 川跡地盤層の形成

川跡の地盤層の形成過程を考えるうえで看過しえないのは、その下層で確認された縄文時代前期の遺物包含層の存在である。それはX2Y9区では、川跡形成面の4m近く下層の深部にみられる。この縄文時代前期の層から上面までのあいだには、遺物を含まない泥土と砂（質土）の厚い層がみられ、それが水性の堆積によって形成されたものであることを示している。しかもX3Y13区のトレンチ断面でみると必ずしも水平ではなく、レンズ状の堆積がおり重なるように幾層も認められる。こうした堆積状況は、不安定な氾濫がくり返されたことを示し、絶えまない沖積作用によってこの谷平野がしだいに埋没していく過程を物語るものである。また川跡の地盤をなす上層のシルト層は、ほぼ水平に堆積していることや微粒であることから、その形成段階にいたって沖積作用が安定し、現在にはほぼ近い「地盤」が形成されたことを示すものであろう。その間の経過時間を知る手がかりはもたないが、少なくとも縄文時代前期以降の数千年の時間幅のあることは疑いない。

(2) 河道SD01・04の形成と消長

河道SD01・04の形成とその流路 ついで、上記のシルト層を切りこむように河道SD01とSD04が形成され、蛇行しながら北西方向に流れている。このことは、北側の57年度調査区内でSD01の上流とSD04の下流が合流していることや、下層の遺物のあり方から明らかである。SD01の川底から出土した弥生時代終末期の土器は、河道の形成・存続時期の一端を示すものである。

調査区の北西端でとぎれる河道SD01の下流は、おそらくさらに北西にのび、こんにち谷平野の中ほどを北流する下条川の旧河道に達していた蓋然性が高い。一方、その上流は、ひとつには河道SD04の南東の未調査区に求めることができ、上野集落の東の谷奥にその源を発するものと推定される。他のひとつは、北接する57年度調査区のさらに北側に求めることができ、こんにち太閤山の住宅街となっている東側の谷筋から流れでたものとみることができよう。

以上みたように、2次にわたる調査で検出されたSD01とその上流は、谷筋の流れを集めた「古下条川」の支流のひとつと考えられるのであり、人工的な開削による「大溝」とはまざみなしがたい。言いかえれば、往時の自然河道が埋没したものであって、標題に掲げたごとく「川跡」と表現しうるものである。

谷平野の開発と小河川 この川跡は、確かに自然の小河川には違ひなかった。しかし、この下条川水系の谷平野でも、遅くとも弥生時代の後期には、こうした小河川を灌漑用に利用しながら谷水田の開発が進められたと考えられる。後掲の橋本真紀夫報文が明らかにしているように、花粉分析の結果、SD01の川底でもイネ科植物(Gramineae)の花粉が検出されていることはそれを一部裏づけるものである。また周辺の遺跡に目を向けると、南方約500mの上野遺跡に弥生時代終末期の集落がすでに形成されている。そして、同じ南太閤山Ⅰ遺跡のB・C地区(東側の丘陵上)にはほぼ同時期の方形周溝墓群が営まれている。これらの遺跡は、下条川水系の谷平野を生産基盤にして農耕集落が形成され、墳墓が営まれたことを示すものである。

河道SD01・04の消長 先に示したSD01の土層断面図(第2図)に即していえば、弥生時代終末期以降、川底の7層から6層→5層→4層へとしだいに河道の埋没が進行し、3b層によって示される古墳時代前期の後半(5世紀前半)には、この川は、當時水の流れることのない沼状の「淀み」ないし「ぬかるみ」に近い状況を呈していたよう

ある。すなわち、土質と堆積をみたとき、4層や7層が流水性の堆積を示すレンズ状の砂層であるのに対し、3b層は植物遺体を密に含む茶褐色の粘質土であることや、3b層の上面が、わずかに窪んでいるとはいえば平坦になっていることからそれを窪いしことができる。上にのべたことは、後掲の花粉分析の結果に基づく植生復原と照らしあわせても矛盾するものではない。ただ、3b層の上面には、第4図にみるとく河道にそって自然流木が集中して堆積していたので、おそらく増水時(期)には流路となっていたようであり、河道そのものはなお存続していたと推定される。なお、上流のSD04では、橋状遺構の下層の茶褐色粘質土がこの「滯流性」の3b層に相当する。

SD01・04は古墳時代後期に至っても前代と大差のない状態が続いているようである。SD01の3b層の上面に薄く堆積した3a層がそれを示す。ただ3a層では、ふたたび砂を多く含んでおり、一定の水の流れはあったとみてよい。SD01の3a層出土の須恵器(第11図81・82)やSD04出土の土師器(第9図53~55)は、いずれも5世紀未ないし6世紀前半のものであり、これによって3a層の形成時期の一端をとらえることができる。また3a層から2b層の下面にかけて7世紀初頭の須恵器、奈良時代の土師器と須恵器が含まれているので、その間には大きな変化ではなく、水の流れの少ない比較的安定した滞流状況にあったと考えられる。もっとも奈良時代には、SD01内ではその東側(X1・2 Y11-12区)を、SD04内では西側を、川幅を狭めながら流れているようである。SD04内の橋状遺構やその北側一帯から出土した須恵器の杯がそれを示している。

(3) SD02・03の形成と川跡の消滅

SD02・03の形成 一方、上にのべたSD01・04がかなり埋没したころ、遅くとも古墳時代の終末期、7世紀の初頭にはSD01とSD04の中間に浅い溝SD03が形成され、奈良時代から平安時代中期ごろまで存続していた。SD03は、先にものべたように蛇行しながらSD01の東側の上層に流れ込み、SD02となって西流していた。その下流は、SD01と同様、調査区の北西の隅に達しており、おそらくまさに北西の「古下条川」にのびていたはずである。

このSD03では、後述するとおり奈良時代の後半に人面墨書き土器を用いた祭祀、——「祓え」の儀式が行われた。隣接するSD04の上層から出土した「斎車」状木製品もそれと深く関わるものであろう。

川跡の消滅 SD02・03では、平安時代中期の土器を最後として遺物はみられなくなる。平安時代後期以降、この溝もしだいに埋没していったのであろう。またSD03の埋没が進行するにつれ、SD01やSD04などの旧河道もほぼ同時に底を削したものと思われる。そして遅くとも中世には、その上層に水田が形成され、こんにちには近い景観が出現していたであろう。花粉分析の結果、近年の耕土直下にみられた2a層でイネ科植物(Gramineae)の花粉がもっとも多量に検出されたのはそれを裏づけるものである(付載1、橋本報文fig.1参照)。

(岸本雅敏)

2 木製祭祀具について

祭祀具には石製、土製、金属製品などがあり、これらと同様に木製品の祭祀具の存在を指摘したのは、大場磐雄氏であった〔大場1937〕。その後木製祭祀具は、平城宮跡や各地官衙跡などの調査の進展に伴い、確実にその数を増し、最近では金子祐之氏の体系的研究がある〔金子1975〕。金子氏はその論考で、木製祭祀具や木製形代の名称で呼ばれてきたものを木製模造品の名称で概括し、その成立期を7世紀後半の天武・持統朝の頃とする。そしてこの時期に從来の伝統をもとに、新たに中国系祭祀具をつけ加え、再編成させたと推察する。このことは、多様な祭祀具を体系化し、その成立と展開について論証したものとして高く評価される。

ところで、南太閤山I遺跡からは、人面墨書き土器や斎車など、律令的祭祀を裏付ける資料が出土している。しかし木製祭祀具に限って見た場合、その出土位置、層位などから、一律に律令期の所産とは考え難いものを含むことと、その種類において、刀形木製品と斎車の二者しかなく、斎車は祭祀具でありながら、その用途において、模造品とは考え難いことから、あえて木製祭祀具の名称を用いた。ここでは前章で省略した遺物の観察を通して、当遺跡の性格の一端にふれてみたい。

(1) 種類とその年代

刀形木製品（2・3）2は刀身部分。棟は平に作り、身の調整は片面がていねいに行なわれる。残存の長さ22cm、幅2.5cm。3は刀身の半分を欠く。柄の基部は丸く仕上げ、環頭太刀あるいは頭椎太刀を模したことも考えられる。区は明確に表現され、刃部も両面から削り、鋭角を作る。平棟。残存長25.5cm、身の幅3.2cm。柄基部から区までの長さが11cmであり、全体のバランスから、刀身はかなり長いものであったと推察される。

これらは、いずれもSD04から出土し、層位は3b層である。したがって刀形木製品は、古墳時代後期に比定される。県内では初例である。

斎串・串状品（1・11・16・18～46）明らかに斎串と認められるのは1のみで、19・20などは一部を欠くが一応、斎串と考えられるものである。他のものは、カッターナイフの刃状のものや台形のものなど、多様である。後者については、静岡県神明原・元宮川遺跡に例があり、斎串として紹介されているが〔静岡埋文研1983〕、確証を得るに至っていないと解し、あえて串状品と呼んだ。なお、1・11・12を除いては全てSD04からの出土である。

1は頭部を主頭状に下部を剣先状に作るもので、頭部側面には、切り込みが施されていたと考えられる。いわゆる削りかけである。表面の調整が中央部から両側に行なわれるために接線が中央に残る。裏は割り面である。全長19.4cm、幅2.5cm。19・20は細い板の先端を尖らせたものである。1・19・20ともに板目材を使用する。21～46はX4 Y19から一括して出土したものである。何らかの組み物かとも考えられたが、法量、形状などに個々性がなく、それは否定される。15～17cmのものが最も多く、幅は2cm前後である。全て柾目板を使用する。

この串状品については、京都府長岡京左京三条二坊〔高橋1975〕や難波宮跡などに例があり、斎串として取り扱われている〔奈良文研1985〕。これらは、人形や削りかけなどに伴って出土していることが根拠とされる。当遺跡の場合には、刀形木製品や人面墨書き土器などはかなり離れた地点から出土しており、また13や14のように幅の広いものなども存在することから、斎串と断定するには根拠に欠けると考える。ただし、一括して26点の串状品が検出されたことは、使用後意識的に遺棄されたことを窺わせるものであり、その用途が斎串であったことも否定し得ない。このようなことから、とりあえず串状品と呼んでおく。

この串状品は3a層からの出土であり、奈良時代後半に比定される。

(2) 小 結

南太閤山I遺跡から出土した木製祭祀具には、古墳時代のものと奈良時代のものがあることが判った。前者は環頭太刀あるいは頭椎太刀を模したものと考えられるもので、その盛行期と矛盾しない。このことは、当遺跡でも出土している、子持勾玉・有孔円板・臼玉などと同様に古墳時代祭祀遺物の一つと考えることができ、木製祭祀具が普遍的に使用されていた可能性を示唆する。

斎串の性格については、その形態から祭祀遺物と推測されながらも、具体的な内容は不明とされてきたが、最近報告された山形県俵田遺跡〔佐藤・安部1984〕では、人形のまわりに斎串や馬形を立てて、囲んだ状態を留めて発見された。この事例から金子裕之氏は、祭祀空間の結界を表すために使用されたと考察する〔金子1984〕。この考察は、俵田遺跡における遺構の状態が良好であることと、「延喜式」の四時祭・祝詞の大祓条と一致するという根拠を持つだけに妥当と考えられる。

ところで、当遺跡から出土した斎串及び串状品は、前述のように多様な形態である。この中で共通するのは、先端が鋭角に仕上げられることであり、土中に突き立てて使用する斎串の機能的一面を有するものである。また、その出土状況が、まとめて遺棄された様相を呈していることからも、串状品と呼んだものが斎串である可能性を指摘できる。所属時期は奈良時代後半であり、律令的祭祀の普及した時期にあたり、同時期の人面墨書き土器も出土していることから、当遺跡で律令的祭祀が行なわれ、それにこれら木製祭祀具が伴っていたと想像するに難くない。（関 清）

3 人面墨書き土器について

出土遺物のなかでとくに注目されるのは人面墨書き土器である。北陸地方での出土初例となったこの土器について、ここでは既成の研究成果に照らしながら若干の検討を加えてみたい。

(1) 人面墨書き土器とは

人面墨書き土器とは、文字どおり人面を墨書きした土器をさし、一般に土師器の甕や盃の外面に墨で人面を描いたものである。通常、河道や溝などかつて水の流れたところから出土し、ときに井戸からも出土する。奈良時代の後期から平安時代前期に盛行し、一部は中世まで受けつがれる。土器に描かれる人面のモチーフは、ドングリ目、たれ目、あるいはつりあがった目に、鼻はダンゴ鼻で顎は髭づらといった男の顔である。その表情も恐ろしげな顔、病みにつかれた顔、おどけた顔などさまざまである。だが、いずれも古代の他の戲画とは趣きを異にし、そこには手本にならったかのごとき共通性の見うけられるものが多い。土器に描かれた顔は疫病神や邪鬼を表わしたもので、人面墨書き土器は、身に憑いた病神や罪・穢れを息吹きとともに甕に封じこめ、水に流したものとされている。こうした儀札は、ほんらい中国の道教の思想・儀礼由来するもので、奈良時代に中國から将来され宮廷内での「大祓」の体系化のなかに組みいれられたと考えられている。それはおそらく律令制下の地方行政機構（おそらく國衙）を媒介として、やがて地方にも伝播していったと思われる。その意味で人面墨書き土器を用いた「祓え」の儀式は、成立当初には中央的・律令国家的な性格を色こくおびた祭祀であったと思われる。

(2) 南太閤山Ⅰ遺跡の人面墨書き土器

今回出土した人面墨書き土器（以下、人面土器と略）も各地の諸例のあり方と基本的に異なるところはない。したがって上に述べた人面上器の一般的性格を内包するものと考えてよい。まず出土地点はS D03と呼んだ浅い溝内である。時代は伴出の須恵器から奈良時代の中頃から後半と考えられる。つまり人面上器が盛行した時期である。

人面土器は2点ある。1点は土師器の小型の甕で、他の1点は無高台の須恵器の杯である（第26図1・2）。甕には4面にやはり髭づらの男の顔が、杯にも3面に同じく男の顔が描かれている。他の諸例と同様、いずれも個々の土器の人面は同一人物の手で描かれている。人面上器に描かれる顔面の数は、1面を別とすれば一般に2面・4面・6面と偶数のものが多い。その点で上記の杯の3面というのはやや特殊である。また須恵器の杯を利用した例も少ない。

土師器の甕は口径13.5cm、器高12.4cm、径高指數92で、当地方で一般にみられる在地産の日常用土器である。底部には焼成後に小孔が穿たれているが、これはおそらく、日常用の土器を「祓え」の儀式用に転用するにあたって、仮器としての性格を付与するために穿孔したものと考えられる。

なお、人面上器の細部の諸特徴については、「遺物」の項で詳述したとおりである。



第26図 人面墨書き土器と「人面用土器」

(3) 「人面用土器模倣形態」の甕

人面土器と間違して看過しない土器に1点の土師器の甕がある(第26図3)。同じく溝S D03内の入面土器のごく近くから出土したものである。この種の甕は北陸地方にはまずみられない器形である。北陸地方の小型の甕は、前記の人面土器に示されるように、一般に径高指数が100前後ないしそれ以上であるのに対し、この甕は口径18cm、器高10cmで径高指数は56である。一方、この土器に近い器形は平城京出土の人面土器のなかにみられる。その甕には、日常用の土器が転用されたものと人面を描くために特別に作られた「人面用土器」との二種あるが、この甕は後者の一部により近い。具体的にいえば、平城京右京八条一坊十一坪の溝SD920出土の人面土器はA~Jの10形態に分類されている〔奈1984〕が、なかでもそのJ形態ないしD形態に近似する(第27図)。ちなみにJ形態の径高指数は、例示した第27図3が45、同4が50、そしてD形態(第27図6)のそれは61.5である。

以上みたようにこの甕は、平城京の人面用土器に形態的な共通性を見出せる。けれども土器の成形・調整技法は明らかにそれとは異なる。平城京の人面用土器は、皿状の型の内側に粘土をつめて底部を作り、型をつけたまま粘土を巻きあげて上部を成形し、「胴部・底部外面には特に調整を施さず、型の痕跡と粘土紐巻き上げ痕をとどめる」ものである〔巽1983〕。しかしこの甕はまずそうした成形技法によるものではない。また調整技法は、胴部の下半から外底面の全面をヘラケズリするものである。こうした外面のヘラケズリ技法は、北陸地方では奈良時代以降の土師器の甕と鍋にはば普遍的に認められる。事実、在地産の日常用甕とした前記の人面土器(第26図1)もその例にもれない。

以上の諸点から、平城京の人面用土器に近い器形をもち北陸地方の技法で作られたこの甕は、それを模倣して作られた「人面用土器模倣形態」ともいいくべき在地の土器であると考えてよい。だがこの土器自体には人面が描かれていない。これをどう解すべきか。実は平城京の人面用土器には人面の描かれていないものが多数ある(第27図5・6)。先にふれた溝SD920では、約460個体の人面土器とともに「無文の」人面用土器が約200個体出土しており、これらも

人面を描いたものと同じく祭祀に使用されたと考えられている。

だとすれば、この人面用土器模倣形態の甕もまた、前記の人面土器とともに祓えの祭祀に使用されたものとみてよい。上にふれたその出土状況からもそれは首肯される。その意味でこの甕は、人面こそ描かれていないが在地における「人面用土器」そのものといえる。この土器の存在は、人面土器祭祀が中央から伝播したという旨意の考え方をさらに裏づけるものである。

(4) 人面土器祭祀の背景

人面土器による祭祀は、「中央畿内で盛行し、おそらく各地に赴く官人たちによって地方にも伝えられ」と言われている〔小出1981〕。これは認めてよいが、この遺跡のはあい越中国府推定地(高岡市伏木)から約11kmも離れており、ただちにそれと結びつけることはむつかしい。また射水郡衙の所在地も不詳であり、それと関連づける材料もない。あるいは逆に、この土器から至近地における郡衙の存在を推定する考えもあるが、現状ではむしろ数キロ内外の至近地にこうした人面土器を用いた祓えの祭祀を行なうような官人層が居住していたことを示唆しているように思われる。

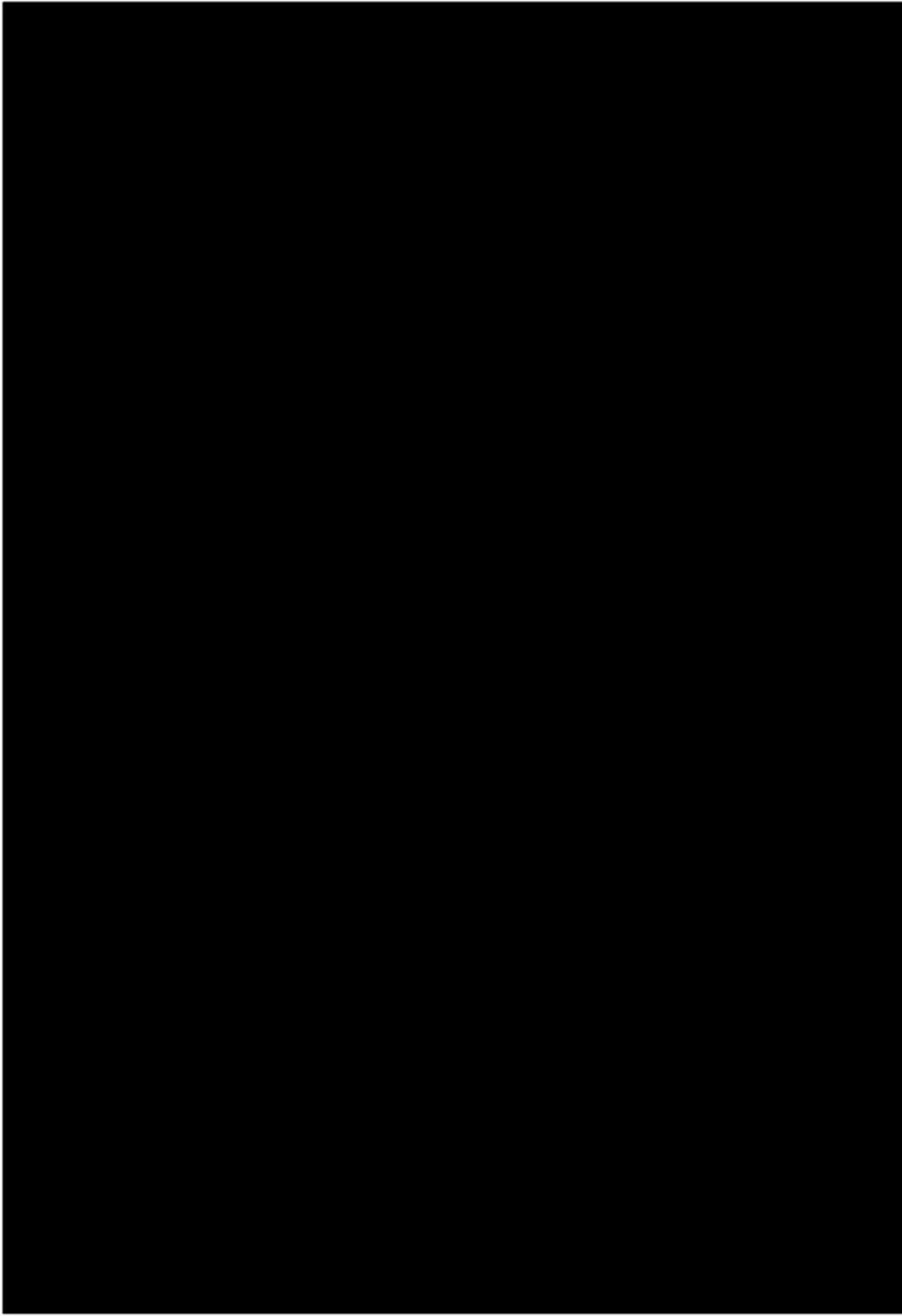
(岸本雅敏)

第27図 平城京の人面墨書き土器と人面用土器

〔奈文研1984〕

参考・引用文献

- ア 愛知県教育委員会 1980 「愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（1）」
愛知県教育委員会 1983 「愛知県古窯跡群分布調査報告（III）」
- イ 池野正男・宮田進一・斎藤 隆 1983 「南太閤山I遺跡」「都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要」富山県教育委員会
- ウ 上野 章・狩野 謙・池野正男・宮田進一・久々忠義 1982 「富山県小杉町・大門町小杉流田地内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
- オ 大場磐雄 1937 「上代馬形遺物に就いて」『考古学雑誌』第27巻4号 日本考古学会
乙益重隆他 1980 「上総菅生遺跡」中央公論美術出版
- カ 金子裕之 1975 「古代の木製模造品」「研究論集VI」奈良国立文化財研究所
金子裕之 1984 「祭祀」「平城京右京八条-坊十一坪発掘調査報告書」奈良国立文化財研究所
- キ 木倉豊信編 1958 「小杉町史」前編 小杉町
- ク 久々忠義 1984 「江上A遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告一上市町木製品・總括編一」（本文）上市町教育委員会
- コ 小出義治 1981 「祭祀と土器」「神道考古学講座」第3巻 雄山閣
- サ 佐藤庄一・安部 実 1984 「俵田遺跡第2次発掘調査報告書」山形県教育委員会
シ 〈財〉静岡埋蔵文化財調査研究所 1983 「宮川地区と古墳時代の祭祀遺物」「調査研究所だより」No.21
神保孝造 1975 「5 高沢島II遺跡 奈良時代の遺物」「富山県砺波市梅横野遺跡群予備調査概要」砺波市教育委員会
- タ 高島忠平・橋本 正・舟崎久雄編 1974 「富山県埋蔵文化財調査報告書 III」富山県教育委員会
高橋 毅 1975 「辰口町来丸サクラマチ古窯」石川県教育委員会
高橋美久二 1975 「長岡京左京三条三坊の調査」「京都考古」第11号
賀津一郎 1983 「人面墨書き土器」「平城京東堀河 左京九条三坊の発掘調査」奈良国立文化財研究所編 奈良市教育委員会
賀津一郎 1984 「祭祀用土器・土製品」「平城京右京八条-坊十一-坪発掘調査報告書」奈良国立文化財研究所
田中勝弘 1973 「墨書き土器について」「考古学雑誌」第58巻第4号 日本考古学会
- ナ 奈良国立文化財研究所 1962 「平城宮発掘調査報告II」
奈良国立文化財研究所 1985 「木器集成図録 近畿古代編」
- フ 舟崎久雄 1975 「富山県福光町占館遺跡発掘調査概要」福光町教育委員会
- ミ 水野正好 1974 「祭祀と儀礼」「古代史発掘 10」（都とむらの暮し）講談社
水野正好 1982 「人面墨書き土器—その世界—」「古代の顔」福岡市立歴史資料館



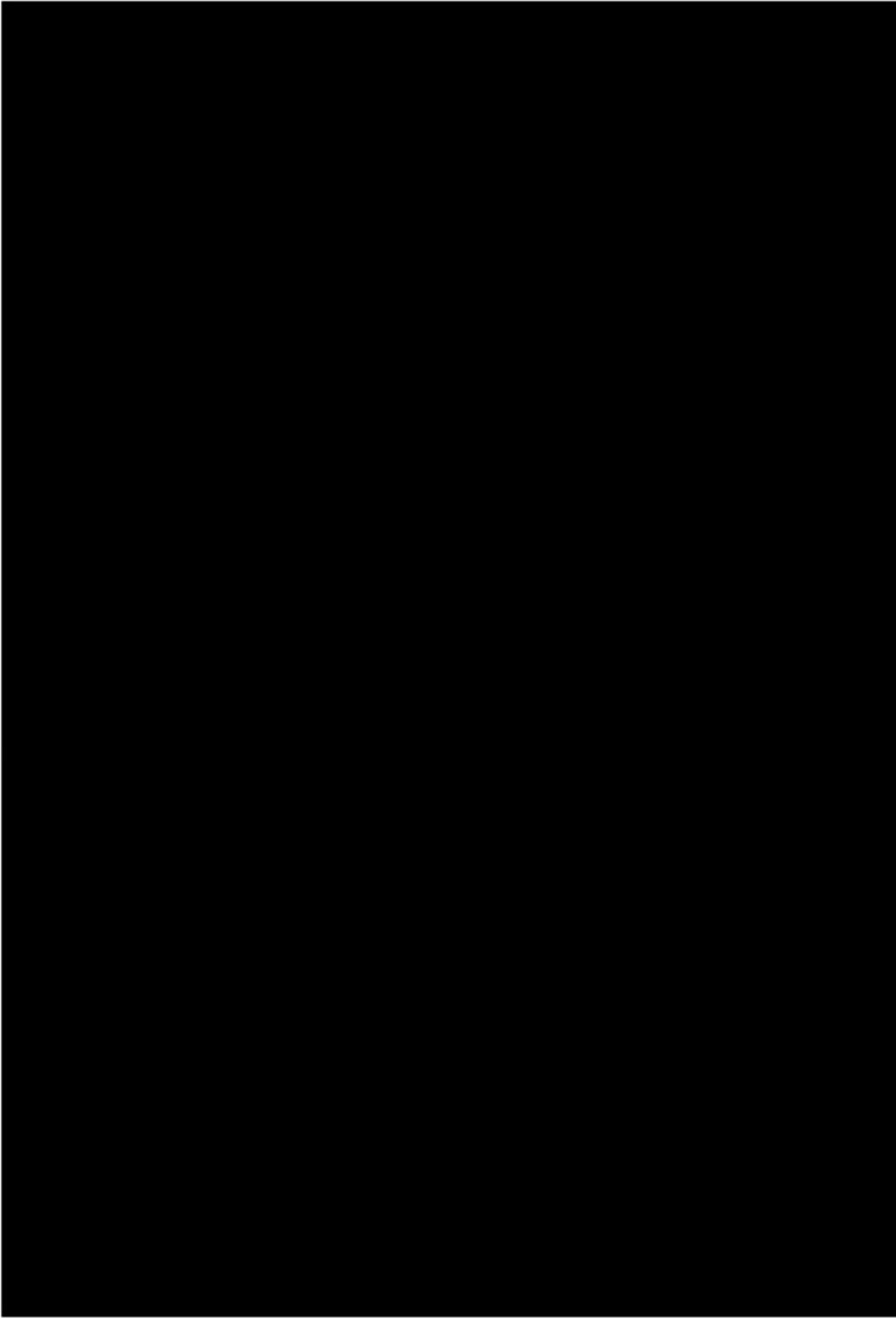


図 版

1.遠景
東から

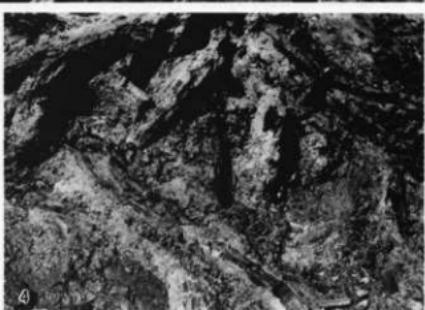


2.全景
東から



3.全景
西から





1. 橋状遺構
(SD04)
東から



1

2. 橋状遺構
(SD04)
東から



2

3. 橋状遺構
(SD04)
北から



3



1. 橋状遺構周辺
(SD04)
西から



2. 土器出土状況
(SD04)
西から



3. 木製品出土状況
(SD04)

1. 木出土状況
(SD04)
西から



2. 木出土状況
(SD04)
北から



3. 刀形出土状態
(SD04)



4. 斎串出土状態
(SD04)

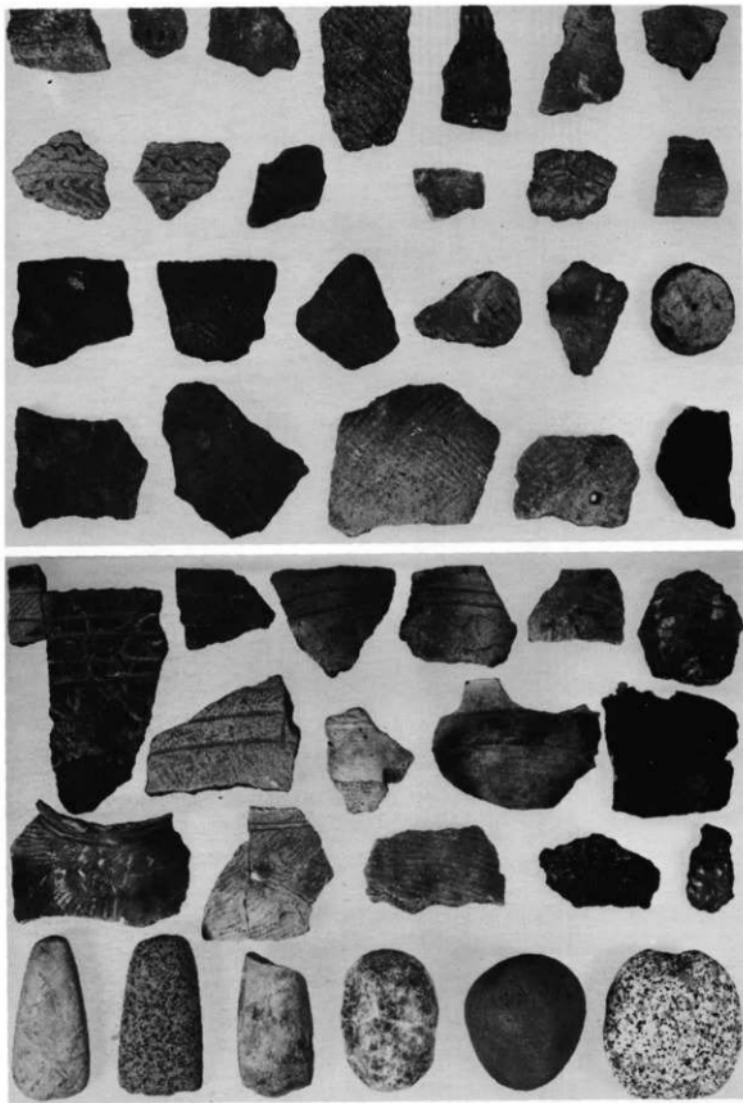


5. 木製盤出土状態
(SD04)



6. 横出土状況
(SD04)







4



3



1



2

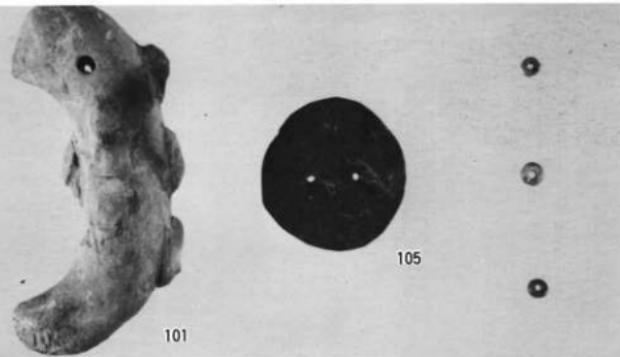


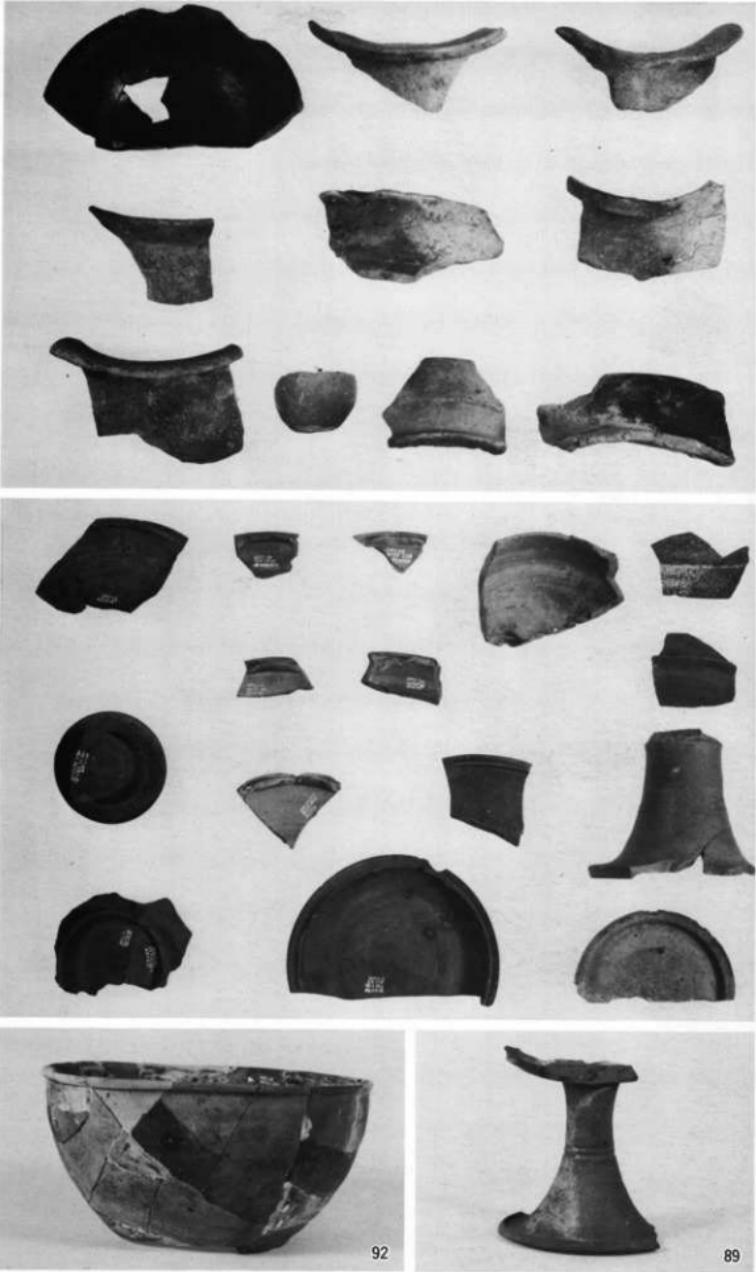
7

5

6

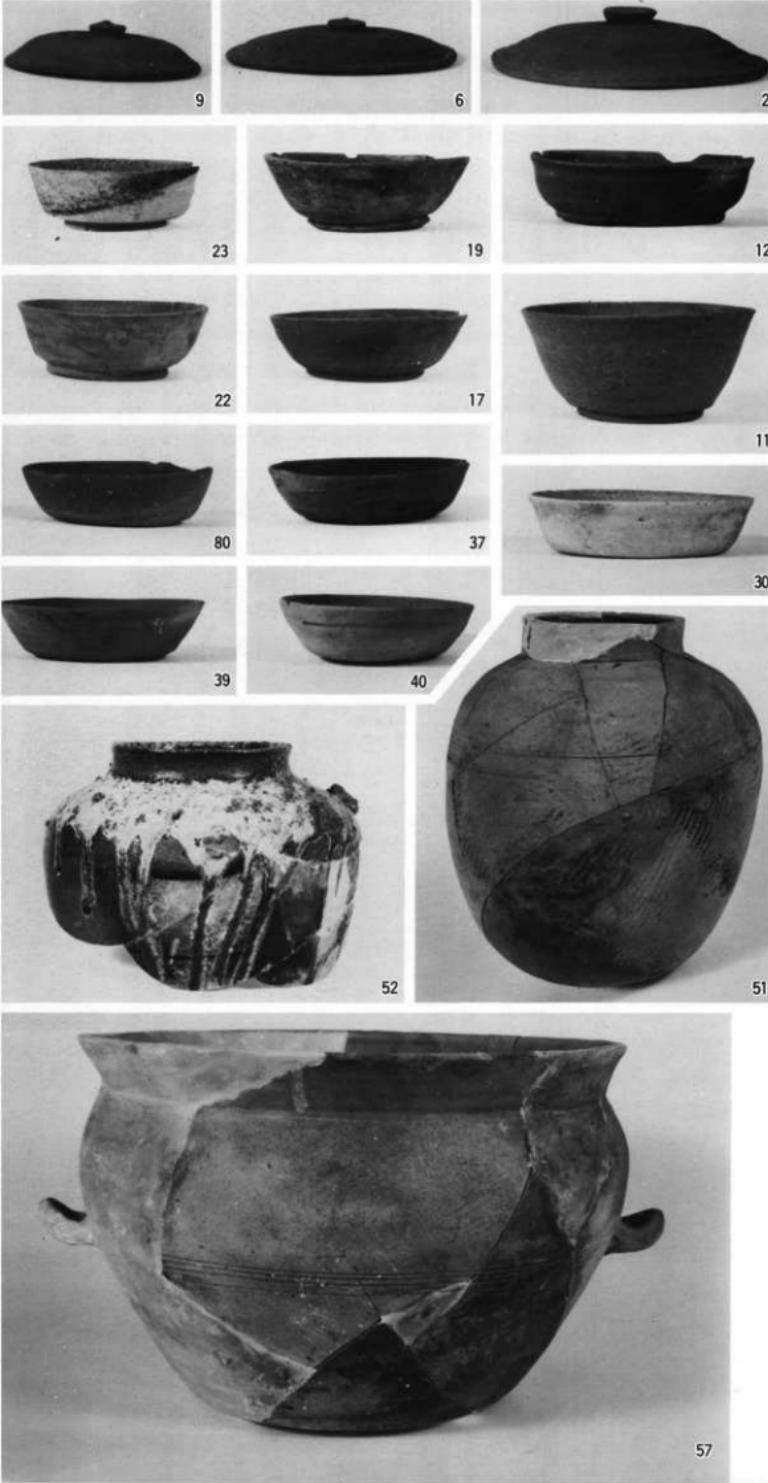






92

89





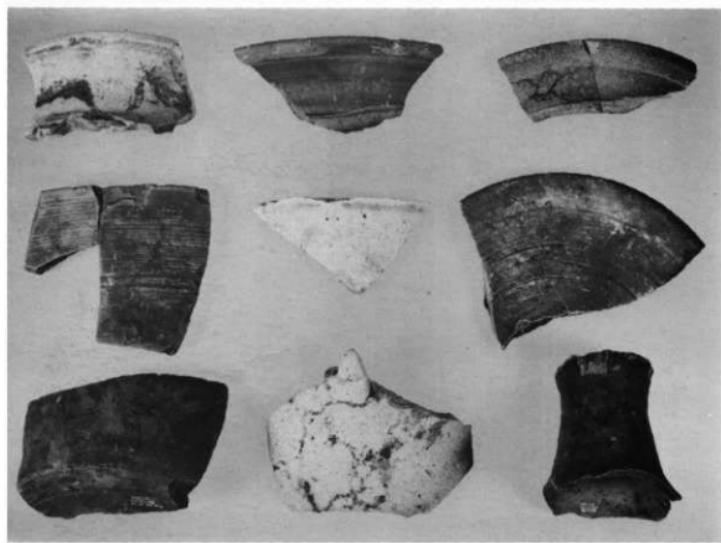
72



71



56





76



78



94



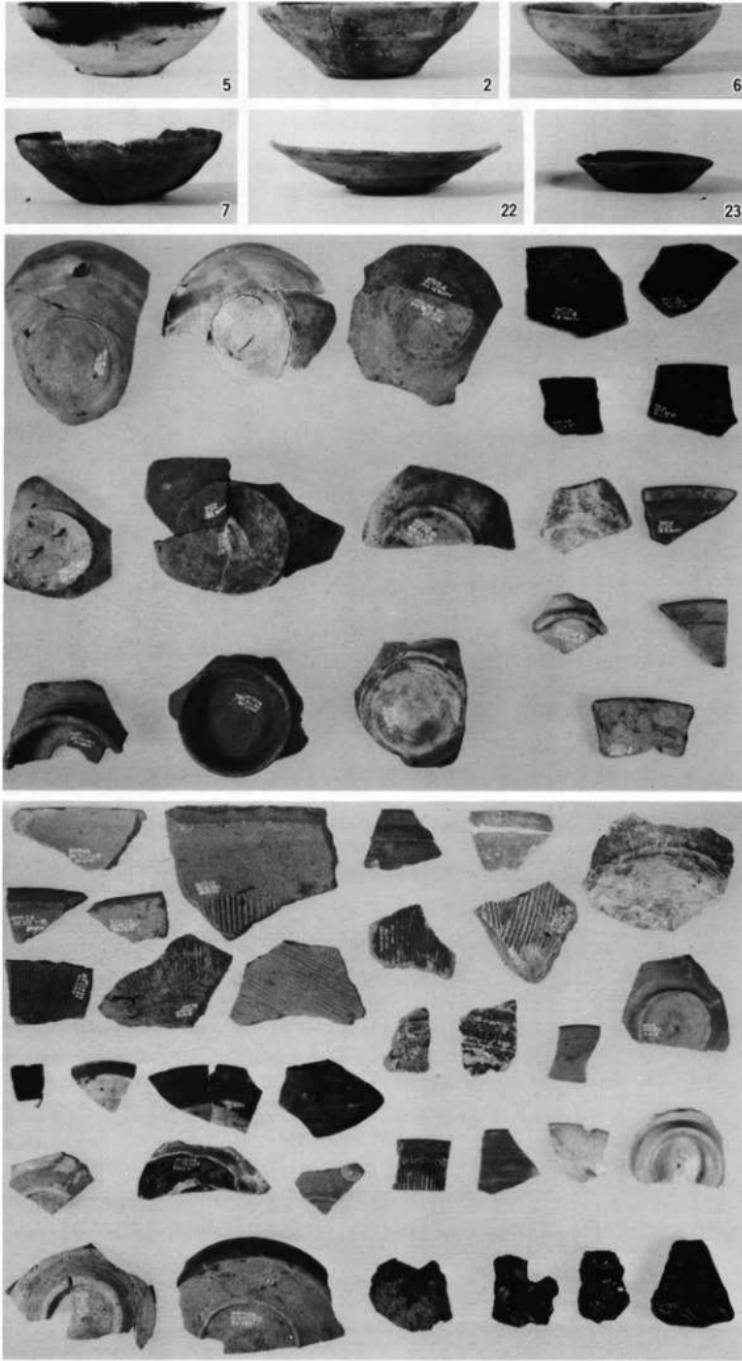
99

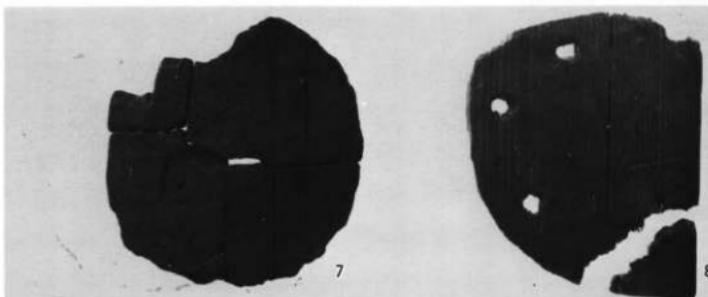
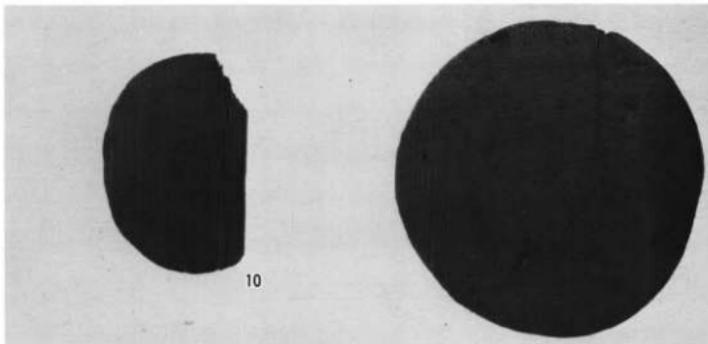
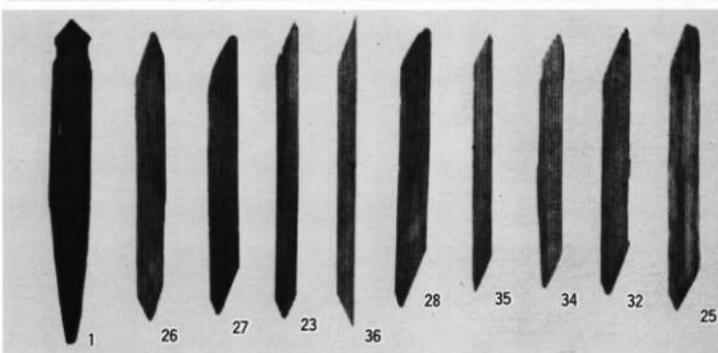
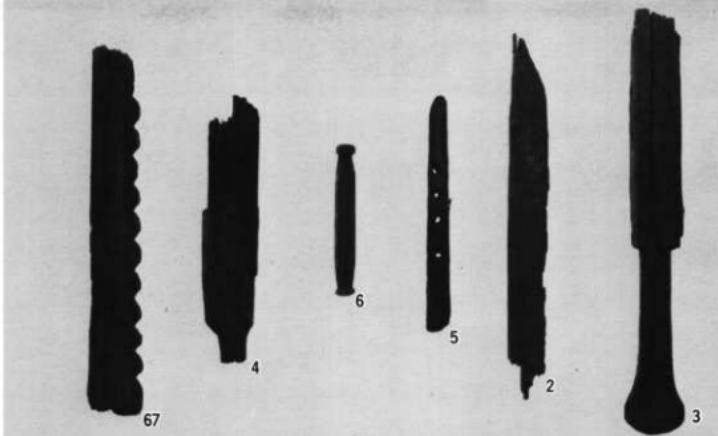


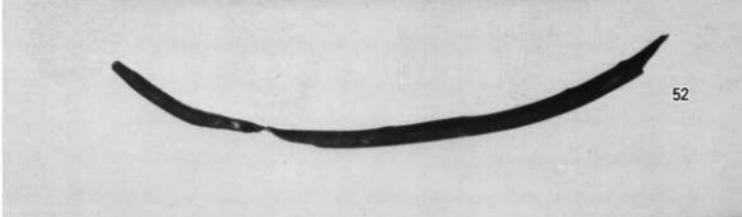
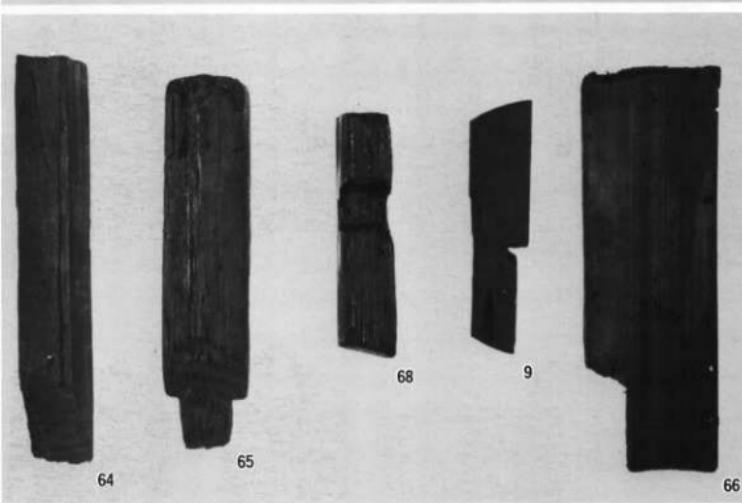
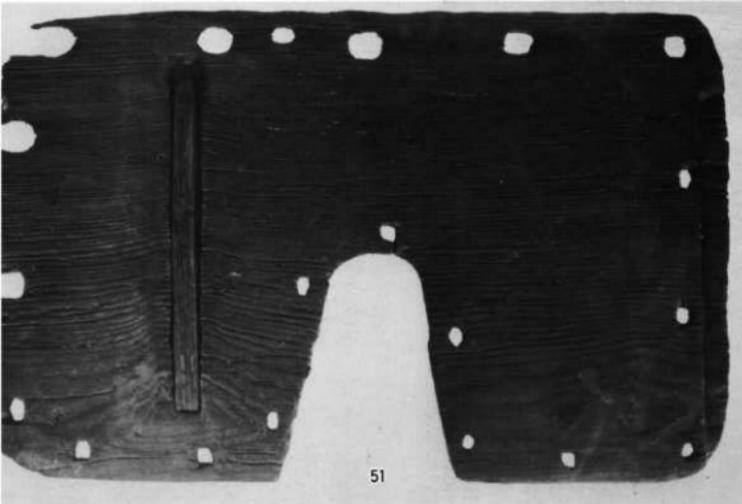
83

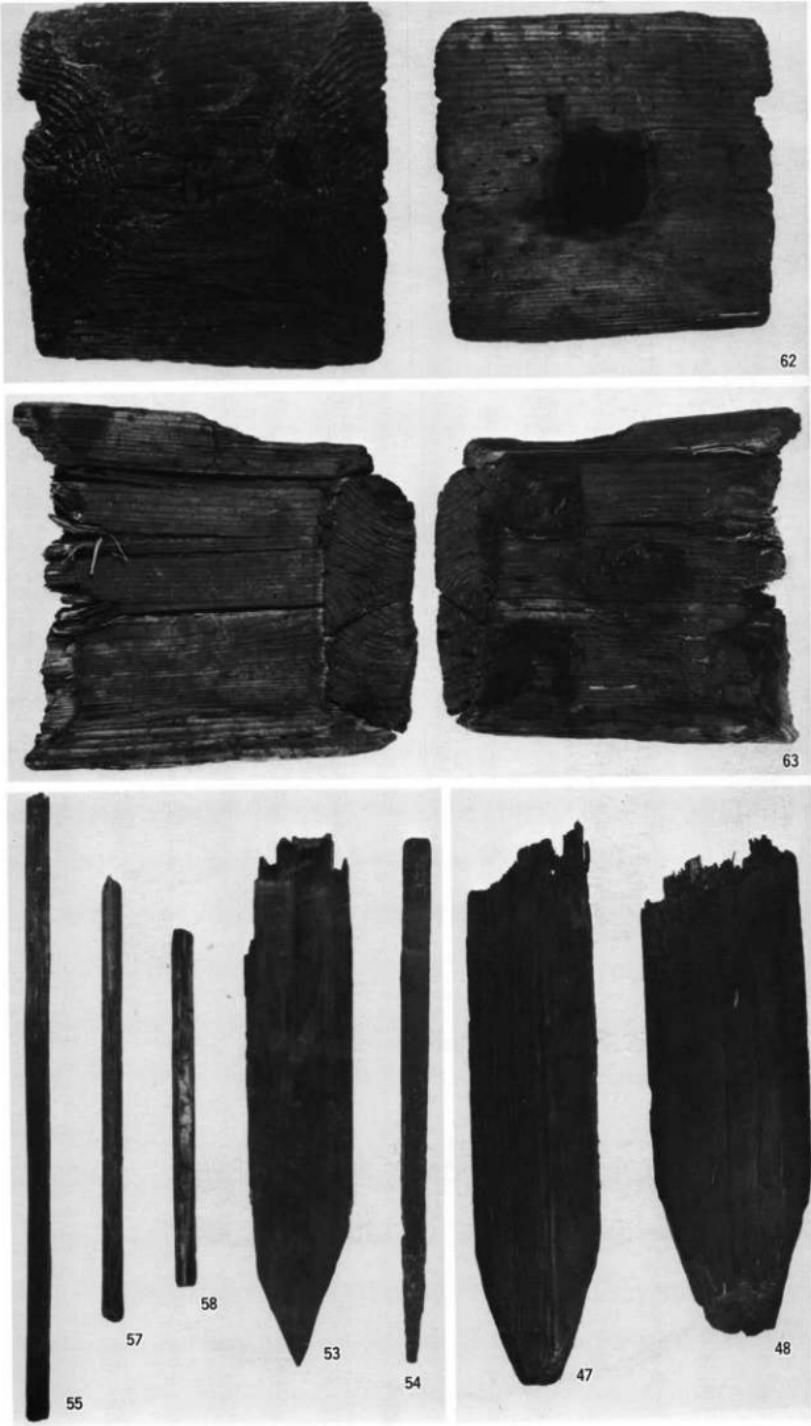


100









都市計画街路
七美・太閤山・高岡線内遺跡群
発掘調査概要(3)

昭和60年3月30日発行

編集 富山県埋蔵文化財センター
富山市茶屋町206番3号

発行 富山県教育委員会

印刷 中村印刷工業株式会社
